中林次男遺句集

俳句の試み

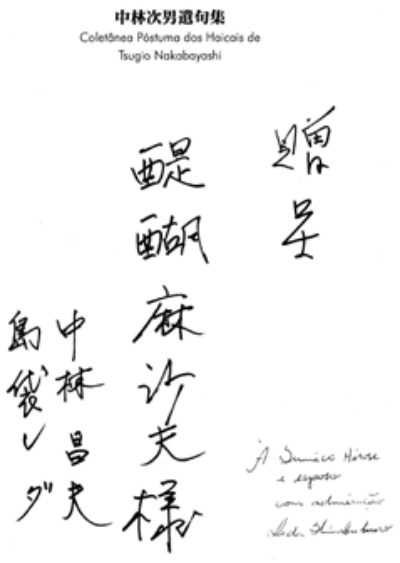
中林　次男
中林　昌夫

構　成
中林　次男
中林　昌夫

出版
島袋 中林レダ 礼子

翻　訳
八巻　培夫

編集者
パウロス美術印刷会社
グラフィック　デザイン
エリオ　ポザルとスタッフ



表敬

父へ

貴方は暖かな揺り籠のように、何時の日も、私が貴方にとって誇るべき人間となる夢を培って下さいました。

そして、これは貴方がこの地上で過ごしたその日々への評価を高め、たとえ何処に居らっしゃろうとも、貴方に微笑んで頂くために捧げるものです。

貴方が突然逝ってしまわれてから、もう長い月日が過ぎてしまったにもかかわらず、未だに私達の名前をつぶやくお声がはっきりと聞こえる感じが残されているのです。その声は「千枝」、「レダ」、「由紀」、「スエ」、「ラウル」と、子供達に話しかける、優しく和らげられた抑揚の中に秘められた、静かな中にも説得力を持つものなのです。

ああ、貴方のその声…それは今なお、私の心に、心地良く生きつづけ、たった今、私の耳元でささやかれたかのように、私に人生の指針を示してくれるのです。

貴方は、私が自分自身の理想を貫く為には、他からの影響に惑わされない事、又、人間関係における愛情の大切さ ― それが幸せを求める為の原動力となる事 ― を教訓として与えてくれました。そしてそれは私達の子孫に残すべき遺産であります。

長い道程を経て、ようやくこの作品のページをひもとく時、その思いには言葉では言い表せない感動を覚え、その感激を共に分かち合いたい気持ちです。このように素朴な形の仕上がりを見つめながら、何となく肩の荷が下りた感じが致します。そして、安易に自分自身の内部へ逃避しつつ、人生を送った、あの孤独で無口、風変わりな貴方に、心から崇敬の念を捧げる事ができたことを幸せに思います。風変わりな変人？ 確かにそうであったかも知れません、然

し、貴方は現代的、そして個性的な自由人でした。
「俳句の試み」は貴方への思慕の具象化なのです。そして中林家のブラジルへの移民七十周年を記念する芳香とも言えるでしょう。探し求める作業は素朴な人との再会によって終わりました・・・素朴な余りに、貴方は、この様な、又はいかなるかたちの表敬をも拒んだ事でしょう。
どうか私を気持ちをご理解いただけますように。

中林敏彦、次男、昌夫3兄弟の子孫とそれぞれの配偶者へ
過去の回想によって、パイオニアの世代の成功や失敗についての理解がもたらされますように…
それによって、夢を実現するための努力の中に、必ずや忍耐、創意、倫理が基本とされ、尊厳と愛に満ちた歴史を後世代に残す事が出来ますように…
いつも揃って、健康で、円満に、そして幸せでありますように・・・
あなたによる、あなたのための・・・「俳句の試み」は私たちの思慕の想いの表現と言えるものです。

島袋　中林　礼子　レダ

献辞
・最もよき友でもある、夫パウロ並びに子供達、ロドリゴ、パウラとリカルドへ。
私の生涯に望んだこと総ての始まりとその継続　ー　それは幸せそのものであり、私に活気を与え、更なる幸を求めるための努力に励みをもたらすものです。この作品を完成させる為、しばしば家

庭に不在の時があった事を寛容な気持ちをもって理解頂いた事に感謝致します。

・私の愛する兄弟たち、マルタ千枝、ミルトン由紀夫、スエリー、及びラウール香へ。

あなた達が明るい世界を増大させるような前向きの姿勢で奏でる魂の賛歌をどんなに嬉しい思いで見つめてきた事でしょう。貴方がたの人生、そして私達の絆が最も輝かしい　光とエネルギーに守られ続けますように。

・血を分けた兄弟のような義兄弟たち、修、ネイデ、ジョンカルロス、ミチへ。

あなた方と人生を分かち合う事は何という素晴らしい事でしょう・・・・・私の両親はあなた方のファイト、思慮、そして、個性の併合をさぞ喜んでいる事だろうと思います。あなた方やそれぞれのご家族（パウロの家族を含む）のお陰で、再会する度に喜びを感じる事家族の輪を創り上げる事が可能となりました。

・息子や娘同様な甥、姪たちカリナ、ファビオ、ダニエラ、エリク、レネ、ケーリ、カミラ、ルシアナ、ガブリエル、ラファエル、タミへ。そして従兄弟、又従兄弟たち、ジェイゾン、ロバート及びアレックスへ。

貴方達が勝ち得た勝利の一つ一つに私の微笑みを、そして貴方がたの涙の一滴一滴に私の慰めの口づけを感じて欲しいと思います。勝利は豊富に、そして悲しみの涙はごく稀でありますように、然しながら、それら全てを貴重な教訓として受け止めつつ前進して下さい。

・従兄弟達ースザナ、マルゴー、リリア、クラウジオ、ジュン　へ。

同じ血縁に結ばれ、悲しみを慰めあい、真の愛への乾杯を共有し、楽しい親交が持てますよう。又、武衛お祖父さんの慈愛のもと

に育まれた未の従兄弟達、ヒデ君とエリゼの為にも同様にその愛が差し伸べられますよう。

・素晴らしいナナ叔母様に

貴方は女性の模範として、厳しい運命によって課せられた過度の重荷に立ち向かい、御自身の超越し、其のエネルギーによって家族の為に尽くして下さり、舅、姑の為に献身　的な介護をして下さり、甥や姪たち（中林　佐野両家の）その他、貴方の心を捉えた大勢の方がたに其の手を差し伸べて下さいました。それは幸せへの追求を恐れないで力強く生きるために貴方から頂いた教訓です。貴方がたが貴重な存在として、其処にそのまま存在するだけで私は幸せです。

追悼の言葉

・第一の母律子と第二の母鎌へ、

私や兄弟姉妹たちに生を与えて下さっただけではなく、人生の正しい進路を示して下さったことに対し、深い感謝の気持ちを捧げます。

・限りない愛情と注意深い配慮をもって私達を見守り、お世話下さった、祖父武衛祖母ふく、そして私達が太っちょ伯父さんと呼んでいた敏彦伯父さんとアリセ菊枝伯母さんに永遠の感謝を捧げます。

貴方方によってこの世に残された立派な足跡に対する私の敬愛の念をおけ下さい。

どうぞ安らかにと、お祈り申し上げます。

注

この小冊子の頒布は著者たちの縁者、友人の方々、及び俳句同好家の方々に限られています。読者の皆様、これを大切な、そして特別な方々への、ささやかながらも愛情の籠った贈り物としてお受け取り下さい。

島袋　中林　礼子　レダ

もくじ

ÍNDICE

はしがき ..... 八巻 培夫 013
PREFÁCIO ..... Masuo Yamaki 015

中林次男年譜 ..... 八巻 培夫 018
CRONO-BIOGRAFIA DE TSUGIO NAKABAYASHI ..... Masuo Yamaki 019

俳句の試み － 遺句集 ..... 中林 次男 021
ENSAIO DE HAICAI ..... Tsugio Nakabayashi

中林家の人びと ..... 中林 昌夫 173
MEMBROS DA FAMÍLIA NAKABAYASHI ..... Masao Nakabayashi

父・武衛 175
O Pai Takee 183

長兄・敏彦 197
O Irmão Toshihiko 202

次兄・次男 207
O Irmão Tsugio 212

末子・昌夫 219
O Caçula Masao 227

追悼集 ..... 寄稿者一覧 239
RECORDAÇÕES ..... dos Colaboradores

・「カンちゃん」コロニアを最も愛した男 ..... 山根 剛 241
Kan-chan, o Homem que mais Amou a Colônia ..... Gô Yamane 244

・追憶 ..... 遠田 七郎 249
Reminiscências ..... Shichiro Toda 252

・次男さん、吾が中学の先輩 ..... 若松 孝司 256
Tsugio-san, meu Predecessor de Ginásio ..... Takashi Wakamatsu 258

はしがき

八巻　培夫

よく考えてみると、次男さんと僕とは人生の幾つかの節目で共通した経路をたどっている。先ずお互いに“準二世”であることだ。渡伯する時、次男さんは１４歳で中学の２年生であったのに対し、僕は９歳で小学校の２年生であったから、日本で成長した年数に５年の差はあるが、未成年者であったことに変わりはない。われわれ“準二世”は、自分の意思でブラジルにやって来たわけではなく、移住する両親や兄たちに連れられて渡伯したのである。それであるから“子供移民”などと、一被扶養者に過ぎなかった未成年者に主体性を持たせるような造語は当て嵌まらない。

僕らの家族は１９３０年1月２９日、日本郵船備後丸で神戸港を出航している。次男さんたちは１９３３年の1月２１日大阪商船ありぞな丸で神戸を出航しているので、ブラジルには僕の方が三年ほど“先輩”ということになる。

着伯後、八巻一家は北パラナのコーヒー耕地に配耕され、中林一家はサンパウロ州カフェランジア付近のやはりコーヒー耕地に配耕されている。いずれの耕地にも学校などというものはなく、中学中退の次男さんも、小学中退の僕もささやかな労働力としてエンシヤーダを引いたのである。しかし、二人が歩んだコースは、この時点ではまだ交差していない。二人が出会ったのはそれから１０数年経ってからだ。

１９４７年、僕はパウリスタ新聞の編集部に入った。次男さんはその時工場にいた。

翌１９４８年、戦後初の日刊邦字紙日伯毎日新聞創刊の計画が具体化し、パウリスタ新聞の営業部、編集部、印刷部のかなりの人達が

退社して“日毎”の創刊に参加した。その中に次男さんも、僕もいた。

１９４９年1月1日に創刊号を出すべく準備中であった１９４８年の９月に次男さんが、そして１１月に僕が結婚した。ここでまた偶然というべきか二人とも義姉の妹を伴侶に選んでいる。次男さんは菊枝（兄　敏彦の妻）の妹　律子と挙式、僕はたけ子（長兄　耕七の妻）の妹　豊子と結婚した。次男と律子の結婚式はノロエステ線ビリグイ駅ビラッキ在のソーグロ木村家で挙げられ、これにはパウリスタ新聞を退社したが日伯毎日新聞はまだ準備段階だったので、花婿の兄勘ちゃん（敏彦）に誘われ、豪勢にも空路馳せ参じた。

しかし、次男さんと僕の間には、絶対に交差することのない一線があった。勝負の世界である。次男さんは父親老中生（中林武衛）ゆずりなのか、将棋がめっぽうに強く、１２回にわたって名人位を獲得、コロニア棋界の頂点を極めている。翻って僕は、将棋はもとより、碁、麻雀、トランプ、花札等々、勝負事賭け事は一切ダメなのである。

“勝負の鬼”のように思っていた次男さんは、１９８８年1月３０日のあさ、７０歳で忽然として逝った。そして7回忌も過ぎた頃、僕がまったく予知しなかった一面を見せてくれた。

１９９５年１０月のある日、次男さんの次女レダ礼子さんが、“これはパパイが書き残した俳句です。ポルトガル語に翻訳して頂けないでしょうか？”といいながら、子供がいたずら書きをしたページがあったり、表紙がなくなっている一冊のノートを僕の手に渡した。ページをめくると、１９８５年2月の“つくばね句会”に初投句した時から死の直前にあたる１９８８年の1月まで、満3年間に作った４９４句が克明に記録されていた。

そのうちの何１０句は日伯修好百周年を記念して増田恒河が編さんした〈自然　諷詠〉や〈つくばね句会１０周年記念句集〉に載録されたものである。次男さんの隠されていた才能に感嘆を久しくさせられたのである。

作品は、遺族たちがポルトガル語で読んで取捨選択できるよう一応４９４句総べてを翻訳したが、種々の都合から、実際に本に載るのは主要なものに限られるようだ。

僕は、約半世紀にわたって短歌にかかわって来たが、俳句は遊びにも作ったことがない。しかし、次男さんの俳句を読んでいると、短詩型の奏でる快い旋律が聴こえて来るような気がしてならない。

八巻　培夫（やまき　ますお）略歴

１９２１年８月２５日福島県伊達郡富野村（後の梁川町）に生まれる。

１９３０年両親に連れられ渡伯。学歴・日ポ両語とも初等科修了後独学。

１９４７年パウリスタ新聞記者を経て、１９４８年、日伯毎日新聞の創刊に参加、後、編集長。１９５８年総合商社太洋物産に入社、１９６０年同社の吸収合併により株式会社トーメンに移籍、３２年間勤続。１９９０年に退社後、翻訳及び著述業。

文学的活動としては全伯短歌大会（１９８６年）代表選第一位、題詠第一位。岩波菊治短歌賞並びに武本由夫短歌賞にそれぞれ佳作入選。「老壮の友」歌壇選者（１９８６～１９８８）、「コロニア詩文学」歌壇選者（１９９６）。

翻訳著書：日ポ＝西田季子歌集「やまばと」、石川啄木歌集「ＴＡ

ＮＫＡＳ」、岩波菊治歌集「時と土」、俵万智歌集「サラダ記念日」、日ポ＝ライムンド・ガデーリャ歌集「水平線という名の海峡」、ライムンド・ガデーリャ詩集「お前自身の中の何処かで」。

1995年10月のある日、次男さんの次女レダ礼子さんが、“これはパパイが書き残した俳句です。ポルトガル語に翻訳して頂けないでしょうか？”といいながら、子供がいたずら書きをしたページがあったり、表紙がなくなっている一冊のノートを僕の手に渡した。ページをめくると、1985年2月の“つくばね句会”に初投句した時から死の直前にあたる1988年の１月まで、満3年間に作った494句が克明に記録されていた。そのうちの何10句は日伯修好百周年を記念して増田恆河が編さんした（自然　讃詠）や（つくばね句会10周年記念句集）に載録されたものである。次男さんの隠されていた才能に感嘆を久しくさせられたのである。

作品は、遺族たちがポルトガル語で読んで取捨選択できるよう一応494句総べてを翻訳したが、種々の都合から、実際に本に載るのは主要なものに限られるようだ。

僕は、約半世紀にわたって短歌にかかわって来たが、俳句は遊びにも作ったことがない。しかし、次男さんの俳句を読んでいると、短詩型の奏でる快い旋律が聴こえて来るような気がしてならない。

八巻　培夫（やまき　ますお）略歴

1921年8月25日福島県伊達郡富野村（後の梁川町）に生まれる。

1930年両親に連れられ渡伯。学歴・日ポ両語とも初等科修了後独学。

1947年パウリスタ新聞記者を経て、1948年、日伯毎日新聞の創刊に参加、後、編集長。1958年総合商社太洋物産に入社、1960年同社の吸収合併により株式会社トーメンに移籍、32年間勤続。1990年に退社後、翻訳及び著述業。

文学的活動としては全伯短歌大会（1986年）代表選第一位、題詠第一位。岩波菊治短歌賞並びに武本由夫短歌賞にそれぞれ佳作入選。「老壮の友」歌壇選者（1986～1988）、「コロニア詩文学」歌壇選者（1996）。

翻訳著書：日ポ＝西田季子歌集「やまばと」、石川啄木歌集「TANKAS」、岩波菊治歌集『時と土』、俵万智歌集「サラダ記念日」、日ポ＝ライムンド・ガデーリャ歌集「水平線という名の海峡」、ライムンド・ガデーリャ詩集「お前自身の中の何処かで」。

PREFÁCIO

Masuo Yamaki

Pensando bem, Tsugio-*san* e eu tivemos muitas passagens comuns ou similares em vários trechos das nossas vidas. Em primeiro lugar, somos *semi-nisseis* – uma geração situada entre o *issei* e o *nissei*. Quando viemos para o Brasil, Tsugio-*san* tinha 14 anos e estava na segunda série ginasial; eu tinha apenas 9 e freqüentava a segunda série da escola primária. Temos, portanto, uma diferença de cinco anos, na fase de crescimento vivido no Japão – o que não faz diferença alguma, no sentido de que ambos éramos menores e viemos para o Brasil, não por vontade própria, mas sim, trazidos pelos pais e irmãos mais velhos que, para cá, decidiram emigrar. Conseqüentemente, não nos cabe a expressão fictícia "imigrante-criança" que empresta falsa subjetividade ao menor que não passava de dependente.

A família de Tsugio-*san* saiu do porto de Kobe, no dia 21 de janeiro de 1933, a bordo do navio *Arizona Maru*, da "Companhia Marítima OSK - Osaka Shosen Kaisha". Minha família embarcou no vapor *Bingo Maru*, da "Nippon Yusen Kaisha" que zarpou do porto de Kobe, no dia 29 de janeiro de 1930. Sou, portanto, seu predecessor em três anos no Brasil.

Ao chegar no porto de Santos, a Família Nakabayashi foi "distribuída[1]" para uma fazenda de café, nos arredores de Cafelândia, interior do estado de São Paulo, enquanto a Família Yamaki vivia em outra fazenda de café, no norte do estado do Paraná. E como ambas não dispunham de escolas ou similares, tanto Tsugio-*san* como eu, que tivemos de interromper os estudos no Japão, fomos transformados em pequenos trabalhadores braçais que empunhavam enxadas.

Entrementes, as estradas em que caminhamos ainda não se cruzariam nessa época. O encontro ocorreu bem depois, em 1947, quando ingressei na redação do "Jornal Paulista" e Tsugio-*san* já estava lá, na oficina tipográfica. No ano seguinte, concretizou-se o plano de fundar o "Diário Nippak", cujo número inaugural estava previsto para o dia 1º de janeiro de 1949. Diante disso, o "Jornal Paulista" perdeu boa parte do pessoal dos departamentos comercial, redação e oficina que correu para lá. Entre eles, estavam Tsugio-san com sua família e também eu.

Nota da Editora:
1 "distribuir" era o termo que designava o encaminhamento das famílias japonesas imigrantes para o assentamento nas fazendas brasileiras no auge do processo imigratório

中林次男年譜

１９１８　１月１０日、中林武衛と輝子の次男として日本国茨城県西茨城郡岩間町押辺１９７５の１に生まれる。
１９２４　４月１日、岩間町尋常高等小学校入学。
１９２９　岩間町尋常高等小学校尋常科六学年の課程を卒業。
１９３０　４月１日、茨城県土浦市土浦中学校入学。
１９３２　ブラジル移住のため、土浦中学校二学年の課程で中途退学。
１９３３　１月２１日、父、継母ふく、兄敏彦、弟昌夫と共に、神戸出港の大阪商船ありぞな丸に乗船、ブラジル移住。
　３月１９日、サントス港着、直ちにサンパウロ州ノロエステ線カフェランジア駅サンルイス耕地に配耕される。
　８月、サン・ルイス耕地を出、同じくノロエステ線リンス駅の牛島植民地に移り、綿や米作りを試みる。
　１０月、農業に見切りをつけ、サンパウロ市に移転、日本新聞や日伯新聞などに植字工、文選工として就職。
１９４１　１２月、第二次世界大戦勃発。日本は敵国ブラジルは連合国の一員として参戦したため、日本字新聞の発行が廃止され、職を失う。
１９４６　第二次世界大戦が終わった翌年、日本字新聞が再刊され、その一つパウリスタ新聞に植字工として就職した。
１９４８　９月３０日、義姉　菊枝の妹、木村律子と結婚。第一回全伯将棋大会がパウリスタ新聞主催で開催され、“名人位”を獲得した。全伯将棋大会はその後発刊された日伯毎日新聞主催に代わったが、通算１２回にわたって名人となり、ブラジル将棋界の頂点に

立った。
１９４９　１月１日、戦後初の邦字日刊紙として日伯新聞が創刊された。工場長として創刊に参加した後４０年の間新聞作りに専念した。
１９５６　４月２７日、律子死亡。遺児は千枝、礼子（Ｌｅｄａ）、由紀夫、すえ（Ｓｕｅｌｉ）。
１９５７　１１月２８日、熊坂鎌と再婚。
１９７１　７月１７日、謙死亡。遺児　香（Ｒａｕｌ）。
１９８５　２月３日、つくばね俳句会に入会、作句を始め、３年間に約５００の俳句を詠み遺した。それらの多くはつくばね俳句会月報、つくばね俳句会１０周年記念号、農業雑誌アグロ　ナセンテ俳句欄、日伯修好百周年記念出版“自然諷詠”などに載録された。
１９８８　１月３０日、死亡。享年７０。死因は持病の喘息による心臓麻痺。

夏館　庭掃く媼　見て過ぎぬ

夏館　西瓜抱えて　入り来る奴

立秋や　帆船一つ　湖暮るる

嫁ぐ娘の　衣装揃いて　秋立ちぬ

夏館
庭掃く媼
見て過ぎぬ

Natsu yakata
niwa haku ouna
mite suginu

Palacete de verão.
Passando em frente eu vi
a velhinha varrer o jardim.

夏館
西瓜抱えて
入り来る奴

Natsu yakata
suika kakaete
irikuru do

Palacete de verão.
A empregada que entrou
carregava uma melancia.

中林次男遺句集
Coletânea Póstuma dos Haicais de
Tsugio Nakabayashi

俳句の試み
HAIKU NO KOKOROMI
Ensaio de Haicai

病葉を　集めて焚火　野良暮れる

朝霧や　厨に首出す　子連れ牛

夕霧の　径駆けて過ぐ　帰省の子

燈下親し　妻子は実家に　行きて留守

天高し　出水の跡に　菊咲ける

夕霧や　移民列車の　去りし駅

夕霧に　移民見送り　母哭ける

燈下親し　残生愛しみ　句に励む

柿三つ　残る梢に　初時雨

末枯るる
貧の一生
悔いはなし

初時雨
暮るるを急ぐ
沖の島

葡萄畑
昨夜の夢の
亡妻おらず

訪ね来し
移民の家や
蔦茂る

乙女等の
矯声はじける
岩清水

夏深む
電灯点さぬ
テレビ居間

赤のまま
いとま乞いして
乳母去りぬ

芒の穂
手折りて戻る
星月夜

妻逝きて
虚脱の散歩
秋の蝉

庭に敷きし
わら真白や
今朝の秋

サツペ小屋の
低き庇に
鳴く鶉

背負籠に
刈り込む草や
朝の露

日本の
見納め夜霧に
消えし船

葉鶏頭
妹と見しは
何時の日ぞ

茶の花の
斜めに匂う
丘の畑

棉殻焼く
煙垂直に
明日も晴

茶の花の
闇に浮かびて
砂丘伸ぶ

庭石の
艶に気づきし
初時雨

初時雨
ネオン冴え映ゆ
街の宵

浮寝鳥
人生かくも
儚きや

柿落葉
人家を恋いて
栗鼠の来る

芒野に
母恋う孤児の
泣く夜かな

秋の虻
二十六階の
窓に消ゆ

馬肥ゆる
国境沿いの
大豆畑

鉢巻で
鋤くは邦人
馬肥ゆる

澄む空に
思念吸われて
秋の虻

草紅葉
連れ立ち歩みし
母いまさず

草紅葉
踏みしだきつつ
墓参道

春惜しみ
妻の手をとり
渚踏む

牛の尾に
まつわる虻や
牧暑し

花マンガ
マリアは嫁に
行くという

花マンガ
婚儀の使者が
馬で来る

春眠を
敢えて貪り
世を拗ねる

逝く春や
一歩一歩と
渚踏む

あと一度
畑見回る
日永かな

狐火や
赤く浮かびて
村更ける

榾跳ねて
導師の法話
つと止みぬ

イエス像
煤けて在す
榾の宿

韮で釣る
羽蟻の穴
庭うらら

身二つと
なる産院の
窓うらら

一家あげ
訪日の夢
冬耕す

凍てる土
発止と打ちて
冬耕す

隙間風
湯上がりの孫
追い立てる

夜逃げせし
荷も頼まれて
転耕す

校了えて
カレー食べに出る
街の寒

開拓村
満目
別れ霜に覚む

流れ雲
春野を遥か
呼ぶ娘かな

向う岸
女人歩めり
猫柳

墓地見える
独り居の窓
春の雨

改札を
出ればふるさと
夏の月

虎落笛
宿に病みいる
老の旅

虎落笛
隙戸に鳴りて
朝の寒

干大根
並び下がりて
冬ざるる

牛の旅
五十キロ来て
村見えず

牛の旅
野営の焚火
牛屠る

啓蟄や
独楽の子集う
日の溜り

祖父ありき
孫育てよと
木の実植う

イペー咲く
句筵の末座
国訛り

地に崩る
父の背震う
別れ霜

墳墓の地
踏ん切りつけり
木の実植う

花嫁の
化粧直しや
風光る

蜂の巣に
かかりてありし
竹とんぼ

風光る
三女医大を
卒えんとす

崖削り
展けしグラウンド
風光る

長靴を
池畔に洗い
春惜しむ

カイサラの
網曳き手伝い
春惜しむ

ジャカランダ
満開双生児
駆け巡る

蛮声の
“帰れソレント”
春惜しむ

意思湧かず
そぞろ歩運ぶ
春の海

無垢めける
尼僧仰げり
ジャカランダ

ジャカランダ
花輪に替えて
農の葬

萌ゆる土堤
白雲追いし
少年期

カイサラ女
とも綱を解く
春の海

マラリア地
知らずや移民
棉蒔ける

童心を
誘い桑の実
色づける

棉蒔き機
こだまし返す
隣耕地

猟銃を
構えて撃たず
通し鴨

友と和す
惜別の歌
青嵐

母の形見
故郷より届く
残り鴨

宣伝カー
流す楽聞き
棉を蒔く

蛇怖れ
素足の友の
送り来し

行水の
残りぶちまく
落し文

甲板に
飛び魚上がる
凪の海

土砂降りの
渦に流れし
落し文

赤道祭
蕪聊の船路
魚飛べり

閘門上がり出し
周遊覧船
灯涼し

ランバリの
鱗白かりし
父の葬

釣り上げし
ランバリ母に
子の笑顔

茗荷の子
年輪刻める
祖母の背

茗荷汁
忘れられざる
かの苦渋

冷そうめん
流れに掬い
灯涼し

老い悟る
転寝癖や
蝿取蜘蛛

米醤油
積んで乗り込む
夜釣旅

子は焚火
妻料理する
夜釣かな

夜釣する
水面に跳ねる
音のみし

夏野炎ゆ
日傘の下の
母小し

数え日や
机上の灰皿
うず高し

日を数え
ペンの走りの
雑となり

叩き割る
ジャッカにかぶり
つく童

数え日や
ペンの走りの
乱れ勝ち

夕凪や
残照柔し
波の皺

獲物
捕りそこねし守宮
落ちて来し

万緑に
咽びつ奔る
渓の水

ジャンガーダ
霞に浮かぶ
椰子の月

万緑や
初孫二三歩
あゆみ初む

万緑の
尾根越え友の
住居訪う

夕凪ぎの
渚に孤影
あるばかり

内省の
性疎みつつ
熱帯魚

万緑の
色染め直し
過ぐ時雨

石岡の
駅舎新し
初帰郷

重ね餅
かしこみ座り
初笑い

心豊かに
生きんと思う
夜の秋

向日葵に
打球当りて
関上がる

花南瓜
一言訊けば
済むことを

向日葵や
走れど尽きぬ
南旅

娘の電話
受けて晩夏の
侘住居

心足る
余生と和む
夜の秋

加わりて
故郷の話
聞く晩夏

仏壇に
手合わす孤影
晩夏更く

竹馬の友の
訃報届きて
今朝の秋

向日葵や
会釈しよぎる
佳人あり

宙に透け
梢揺れいる
夜の秋

日本間に
妻黙しいる
夜の秋

日本間の
一輪挿しに
夏探し

向日葵に
黄の蝶まざれ
いる入り陽

晩夏憂し
苦き思い出
たぐらせる

訪えば留守
土産置きくる
蟻地獄

向日葵の
畑ここにも
車旅

松蝉を
南の旅で
聞く晩夏

妥協なき
性疎みいる
端居かな

白と黄の
母の丹精
花南瓜

金魚池
逃げしを惜しむ
大出水

番い蛇
樹にとぐろ
している出水

姉嫁ぎ
孤り草笛
吹く弟

末だ覚めぬ
カイサラ部落
島の秋

矢印の
日本庭園
ホ句の秋

連れられて
来ても移民よ
走馬灯

虫の声
そぞろ歩みの
夫婦ずれ

虫すだく
月に影引く
姿あり

椰子尽きて
松に変りし
虫の宿

竹馬の友の
訃報手にあり
赤とんぼ

知らぬ顔
無き寛ぎや
露地の秋

走馬灯
思い出わかつ
人の無き

酒場出て
よろめき戻る
露地の秋

柿の紅
秘めごとついと
口の端に

娘付き添い
ゲートボールの
見合いとか

縄のれん
出し足曲る
路地の秋

肩よりの
秋冷えいわず
葬の列

ジャカランダ
ついで参りの
墓碑に散る

挙式待つ
娘にジヤカチロン
降り注ぐ

婚支度
整い硯の
水澄める

背負籠に
弱りしとんぼ
見つけたり

カルナバル
句筵に遠く
高鳴れる

カルナバル
朝覚めやらぬ
街の寂

アンテナの
雲移ろいて
秋の暮

退院の
安堵の窓に
伸ぶカンナ

蓑虫に
慷慨ぶちまく
移民墓地

下婢も来て
燈下に親し
旅土産

カンナ咲く
悲話のみ多き
移民墓地

秋茄子を
送る便りに
近況も

芒穂の
彼方に空の
あるばかり

月ありて
孤りといわじ
秋燈下

サントスの
目の下にあり
秋灯し

風邪の身に
妻の遺愛の
カンナ咲く

止まり木の
淡き燈下に
酌み親し

訪う家の
道遠かりき
花カンナ

バス降りて
知らぬ異郷の
秋惜しむ

誰言うとなく
窓開け放し
庭小春

末枯れや
医師の宣告
哭きつ聞く

嘘と判る
言い訳聞きつ
豆を打つ

小春日や
黄色のスーツ
彼女らし

渡り鴨
難視の刀自
見つけたり

人遠く
なるを諾い
秋惜しむ

逝く秋や
一日ずつの
水の冷え

ニグロ一家
貧しさいわず
豆を打つ

秋蚊打つ
掌に一滴の
血もなくて

秋蚊鳴く
木賃宿の
カマわびし

親子孫
三代リレー
運動会

展望台
端より消して
ゆく時雨

メトロ出て
尖塔のみに
糸時雨

妻を師に
歳時記くくる
宵時雨

不意の客
牡蠣にレモンを
添えて出す

移民列車
尾燈消え行く
駅の寒

混血の
孫連れて行く
移民祭

精つくと
牡蠣すすめつつ
笑む女将

枯牧に
呪いめける
松五本

移民船
通関待って
夜の埠頭

カフェー匂い
時雨しとどと
なりにけり

手術跡
タオルで隠す
湯治客

垣バラの
返り花して
今朝の寒

崖縁に
住む人のあり
神の旗

焚火祭
白装束の
娘らが舞う

ビル火事の
紅焔テレビ
一面に

冬の夜
幽霊話も
尽きにけり

降り立ちし
駅閑散と
枯芭蕉

定年の
暮らしに慣れず
枯芭蕉

枯れ園に
バラ接木する
背の老い

冬の夜
幽霊話も
尽きにけり

降り立ちし
駅閑散と
枯芭蕉

音も無く
夜空に描く
遠花火

定年の
身の置きどころ
無き冬至

野火消して
音しめやかに
椰子時雨

線香花火
幼な心の
今になお

櫓の音の
入り江に沈み
竹瓮上ぐ

花嫁の
長裾弄りて
春一番

冴え返る
カイサラ部落は
十数戸

ものの芽に
割箸立てて
土ならす

ものの芽に
竈の灰を
ひと握り

春一番
ヴェルディの歌劇
聴く如く

物芽萌ゆ
土の温みを
掌に

ものの芽や
和室二畳に
さすやわ日

もの芽出づ
嬰児に笑窪
見つけけり

人影の
無き夜のビル
冴え返る

年金の
幾許ふえて
もの芽吹く

行楽の
予定を組んで
春近し

婚約の
成りて集いの
暖かし

刈り進む
甘蔗畑や
地平線

韓人と
海苔商談の
捗らず

咲き競う
赤百合ぼやけし
春の塵

啓蟄や
主出て来し
日の溜り

春泥を
まろびつ戻る
使いの子

パラナ路の
裾に残れる
春の泥

啓蟄を
掃く癒えし手の
椰子箒

春の泥
胸につけいし
はぐれ鳩

近道を
して迷いおり
春の泥

舞い納め
白蝶墜ちし
春の泥

砂の塔
築く双子の
磯遊び

首揃え
バスを見送る
葱坊主

懐古癖
抑え素直に
磯遊び

屈み摘む
襟足濡らす
春の露

しずごころ
掌に受け止めし
春の露

母は母
子は子で集い
磯遊び

足沈む
砂の触感
磯遊び

畠中を
滑走路截り
葱坊主

亡き友と
ここに佇ちけん
夏の湖

白浜を
黄に染め塗りて
椰子の花

山鳥の
どこにひそみし
青嵐

新樹の闇
ひき裂き妖鳥
羽搏けり

映画館
無くなりし町
椰子の花

屏風雲の
茜湛えて
夏の湖

音もなく
園の新樹に
午の雨

旅土産
解く居間叩く
青嵐

新樹ゆする
寺鐘の余韻
次が追う

夏の湖
銀波にくだける
街明り

夏の湖
昏れなお蝉の
鳴き盛る

新樹並木
ふと耳に入る
国訛り

影と坐す
新樹明りの
山の家

ケーブルカー
新樹近寄り
また離れ

椰子の花
こぼれ潮風
黄ナに吹く

メロン切る
母に幼ら
つきまとう

掃苔や
遺族四人の
言少な

墓参り
馴染みし異人と
目礼す

方丈に
袈裟脱ぎありて
露涼し

木魚打つ
尼僧の項に
夏の月

日雇い農
文盲ばかり
青コーヒー

草矢飛ぶ
渓千尋に
雲流れ

戛然と
碁石の鳴りて
夏の月

縁談の
今日来る日なり
青珈琲

悲しみを
草矢に飛ばし
祖母恋うる

夏の月
籐椅子に母
憩わせて

島多き
水源湖畔
ランバリー

用水溝に
王者然たり
源五郎

水飯に
コロッテ二本
またたく間

一本葵
開かんとして
今日の喜雨

日本趣味
薄れて淋し
夾竹桃

喜雨到り
傘買いに入る
トルコ店

涯のなき
甘蔗畑行く
晩夏径

蜜柑畑
見えつ隠れつ
夏の月

鳳梨畑
よぎり晩夏の
帰路急ぐ

喜雨の庭
異人の嫁に
蛇の目傘

見つけたり
何時か来た径
黄金藤

喜雨空の
公園ベンチに
待ちくれし

豆電球
点りし立木に
さえずれる

短冊は
わが句風鈴
縁に鳴る

キャンプ村
流雲追いつ
喞つ老い

梅酒の
水戸より届き
振舞える

失敗談に
笑い興じて
年締める

晩夏光
浴びて仮睡の
妻老いぬ

喜雨の湖
釣人の影
動かざり

廃屋の
崩れし塀に
ストレリチア

話題途切れ
耳に入り来る
喜雨の降り

雷鳴に
啄み止めし
羽抜鶏

グーチョキパ
孫に負けいて
夏深む

薄れゆく
追慕の念や
墓参り

色鳥の
ついばむ納屋に
茜さす

寒き夜や
けんちん汁を
所望せん

牛車遠く
軋るのみなる
枯野かな

稲妻に
とさかの朱や
羽抜鶏

つくねんと
無聊に耐えて
晩夏更く

中林宗

蛮声の
“帰れソレント”
春惜しむ

Bansei no
“Kaere sorento”
Haru oshimu

Cantando “Torna a Sorento”
em voz berrante,
lastimo a primavera.

意思湧かず
そぞろ歩運ぶ
春の海

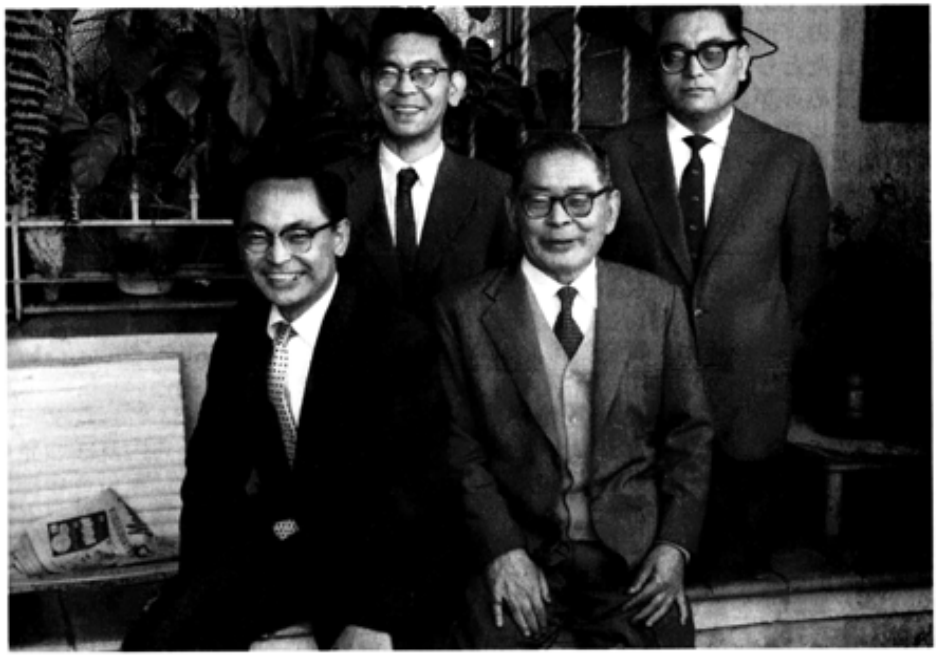
Ishi wakazu
sozoro ho hakobu
haru no umi

Sem vontade,
caminho vagamente.
Mar da primavera.

中林家の人びと　　中林　昌夫

中林家の人びと

中林　昌夫



父　・武衛（前列右）
長兄・敏彦（後列右）
次兄・次男（後列左）
末子・昌夫（前列左）
（60年）

O Pai Takee (sentado, à direita) com os três filhos:
- o primogênito Toshihiko (atrás, à direita)
- o segundo filho Tsugio (atrás, à esquerda)
- o caçula Masao (sentado, à esquerda)
1960, no jardim da casa de Toshihiko (Aclimação)

父・武衛

父・武衛（たけえ）は、１８９０年６月２６日、中林源助、せんの３男として、茨城県西茨城郡岩間町の寒村に生まれ、幼年期には、“神童”といわれた。初等科を卒業するころ、万朝報（黒岩涙香社長）に投稿した北海道のカヌイ・コタンを詠んだ歌が入選、有力紙上のトップを飾ったことがある。「あれは、中林の武さんげな」が口伝えに村中をはしり、本人もさることながら、一家は引繰り返るような大騒ぎとなった。
賞金００銭を貰ったのはいいが、選者の短評を読んだとき、恐しく

なって震えあがったという。その後も、“夢よもう一度”で投稿は続けられたろうが、二度と貴重な紙面を汚すことはなかった。

当時の家族制度は、長男は跡取りと決まっているが、次男坊の学資捻出については、“いろり端”会議が開かれ、どういう理由かしらないが、東京の大倉商業学校に入学することになった。当時としては、東京への進学などは晴天のへきれきであったと思う。

さて、3男であるが、いろり端会議の俎上にも上がらなかったというから、判かろうというもの。進学は断念したが、向学心旺盛、感受性の最も強い年ごろで、独学独習に移行したとしても不思議ではない。15で“才子”、20を過ぎれば“ただの人”となったのであるが、大分県における検定試験を見事にパスして、鉄道員として人生の第一歩を印した。貨物列車後部車掌で、車内事務、発車の合図位で、前部の機関士との会話などなく、お早よう、さようならで終わることの多い、全く孤独の戦いが始まった。その希望のスタートも束の間にして“近視”の極印を頂戴して、自発的に他の道を選ぶのであるが、これも旬日にして、肺結核を患うことになる。当時の結核とは、不治の病といわれた時代で、故郷に帰り、老母の献身的な看護によって病魔と戦うこと　3年余、小康を得てようやく失意のどん底から這い上る。当時は、到底考えれらないような、生卵4個、ご飯は白米、離れに老母と寝食を共にしてぜいたく三味の日課であったというが、従兄弟の間から陰口も聞かれたことであろう。と、いうことは、生卵4個は日産の何%で、牛乳半リットル、白米は老父母のみといって、本家の一従兄弟は、白いご飯を食した記憶がないといったという。幸運にも、バター、パン、ソーセージ、ハムなどカタカナ食品のなかった時代で、あったら内乱ぼっ発も、不可避だったろう。そういう難問を解決したのは老母で

ある。老母は家付きの総領娘で、跡継ぎの弟を隣に別居させ、畑、山、屋敷を独占し、隣村から婿を取り、本宅を継いだというから威厳も甚だしいものがあったのであろう。この財産についてであるが、現地点にお家断絶の“中林屋敷”があった。それを私らより上に数えて，5代目の先祖鈴木某が跡を継いだのである。即ち財産付きの中林家の誕生である。そういう事からかどうか知らないが、この村には中林姓を名乗るものが多い。親族付合いはないが、現在も名前だけで呼び合っている。例えば、武（たけ）さん、敏（とし）次（つぎ）昌（まさ）の如く、上には“さん”がつくが、下は全て呼び捨てである。

さて、これからが、「中林武衛・破乱万丈」である。予後の経過は徐々に快方に向い、妻の郷里・福島県は磐城郡平町（現・いわき市）の炭坑会社（萩原社長）に就職、一躍会計面を担当したというから、社長の病人に対する思いやりというものであったろう。

炭坑は、平町の下で、市民から「そんなに穴をあけたら、地盤がゆるみ町が埋没しないか」の声がしきりに高まるのである。事業は大きいか小さいかは知るよしもないが、燃料のすべてを石炭に依存した時代で、産出量増産に懸命な努力の甲斐もなく、不況の波に抗しきれず破産の憂き目をみるに至るのである。その間、離縁という青天のへきれきを挟んで3人の子供を連れて茨城県に舞戻ることになるが、県紙「いはらき」新聞先代社長・後藤武男氏に拾われて、常陸太田町（現・太田市）支局長として、新聞記者生活を試みるわけだが、支局長といっても、他に支局員はいないのだからご想像頂こう。

まず、長男・敏彦を水戸の茨城高等学校へ、2男・次男を地元の太田中学に、3男・昌夫を太田幼稚園に入園させ、これからというときに、石岡町（現・石岡市）に転勤となり、着任早々に石岡町を

半焼する大火に遭遇する。自宅を焼き、命からがら火の中をさまよい、本社への速報が遅れたということでお叱りを頂戴したという程度でクビだけは免れたという。次男を土浦中学へ、昌夫を石岡小学に転校させ、ここで初めて親子４人が同居することになるが、女手のない家庭ほど殺風景なものはない。また父もわびしさも一入であったろうし、ここに一人の女性が現われたのも当然といえよう。即ち私たちの継母である。このことについては、余り長くなるので、次の機会に譲ることにして、この石岡町の１年半が日本における最後の居住地となって、３３年3月移民として、金の成る木を求めて、早くて5年、遅くて１０年で故郷に錦を飾る“予定”で一行１２人が３班に分かれてブラジルの土を踏むのである。

第１班　家長　中林　定一
妻　おたま
長男　義幸
弟　力

第２班　家長　中林　武衛
妻　ふく
長男　敏彦
次男　次男
三男　昌夫
甥　大兄

第３班　家長　中根　可
妻　よし

本籍は、茨城県西茨城郡岩間町押辺１９７５の１。元来、農業のできる家族ではない。
おまけに数字に疎いと来ている。カフェー、米、綿の木に金の成るのを待たず農業を８カ月で断念し、出聖、こんどは、商業を営む

が、これまた、債権者から資金の回収を怠り、貸し売りの果て破産寸前に太平洋戦争ぼっ発、そして懐しいコンデ街の強制立退き命令である。

父は、よく日本の詩歌を教えてくれた。その中に、同郷の詩人・横瀬夜雨の「お才」、小学唱歌の「鎌倉」「四条なわて」、北原白秋の「さすらいの唄」野口雨情の「船頭小唄」乃木希典の詩「爾霊山」など当時のことどもが脳裏をよぎることがある。特に白秋の一篇は、声を出して唄いながら詩の解説をしてくれた想い出は懐かしい。これは「お前の母さんがよく口ずさんだ」というから、父にとっても、追憶の曲なのであろう。歌詩を以下に掲げ、亡き父母をしのぶことにしよう。

さすらいの唄

北原白秋　作詞
中山晋平　作曲

1、行こうか戻ろか　オロラの下を
ロシアは北国　果てしらず
西は夕焼け　東は夜明け
鐘が鳴ります　中空に

2、泣くにや明かるし　急げば暗し
遠い灯りも　ちらちらと
止まれ幌馬車　休めよ黒馬（あお）よ
明日の旅路が　ないじゃなし

3、燃ゆる想いを　荒野にさらし
馬は氷の　上を踏む

人は冷たし　我が身はいとし
街の酒場は　未だ遠し

4、私しゃ水草　風吹くままに
流れ流れて　果て知らず
昼は旅して　夜は夜で踊り
末はいずこで　果てるやら

父は、１９０８年（明治４１）時事新報新年号に、一般から募集した北原白秋選で歌題「早春」に

春悲し神居古潭の
うづまきの
碧きがなかに
消ゆるあわゆき

が首位人選した。選者評は「風韻の高い、しかも悲しい春の趣きを深く味わいえた作である。作者は、たしかに沈黙の悲哀を知る人である」。

同時に歌題「新年の川」佐々木信綱選にも

茜して霞ながるる
大利根の
夜明け静かに
真白帆下る

が3位に入った。選者評は「一、二の句美しく、新味の歌とは言ええざれど、また誦詠に値す」であった。父１９才の作である。

その他にも「万朝報」俚謡欄で

親の意見も
馬耳東風の
子にも身に泌む
秋の風

で、1円の賞金を得た初めての作。黒岩涙香（当時の「万朝報」社長）選では

蛇の目くるくる
助六気どり
雨の渡しの
花河戸

雑誌「文芸倶楽部」の語呂合せに

月落ち鴉鳴いて
星天に満つ

の歌題に

浮世に永く生きて
死を念じ待つ

が2位に入選し、賞金2円を頂戴し、自惚れは頂点に達した。与謝野晶子選でも

髭多く笑うことなき　ひとり身の
男の家に　緋ダリアの咲く

と、１９０４年（明治３７）１５才の作に

麦の穂先の
孕める中は
筑波むらさき
まだ淡い

が入選、有力紙上に大々的に報道された。

「東京ラジオ」と「老生閑話」

当時のコロニアは、日本の出来事となると、何でも飛びつく時代で、春夏秋冬、東西南北をエッセイ風に「きのうきょう」欄で紹介したが、それが郷愁をそそる祖国の近況で、即ち「東京ラジオ」である。速報は外電の翻訳に頼り、ラジオが唯一のニュース源であった。ラジオは、図体の大きい受話器付き、混線する波長を分離できるということで、1も2もなくそれに決めて購入した。聴取器も専門家にみせたら「これは、いいものですよ、現在のところ、これに勝るのはありませんよ」との保証だったが、雑音甚だしく、音が低くて聴き取れないという代物。救いは電波を分離できることであった。

それでも明日はよくなるだろう、明後日は良く聴こえるだろうで、寒い日でも朝5時から25米、31米の短波を分離しながら、ラジオにしがみついた父・武衛の熱意には頭が下がる想い出が残っている。

この器械は40年ごろの購入で、放送状況もよくなるに従って、難聴から徐々に好転のきざしをみて、41年12月8日の対米英仏蘭の戦争状態に突入するのだが、戦中、軍艦マーチと共に勇ましい戦果の媒体の役目を果たしてくれたのが、このラジオである。軍艦マーチが聴えてくると、きょうは艦を何隻沈めたか、飛機を何機墜

したかの戦果に酔いしれたが、ミドウェイ海戦を境に軍艦マーチの雄壮さも次第にしぼみ、ご存知のような終戦を迎え、玉音放送から戦後処理へ、そして日毎紙発刊へとつながるのである。

当初の写しはシェロクスのない時代で、毎日、１０枚以上コピーを取り、知人に配布した。人間なんて勝手なもので、ニュース紙が欠配でもしようものなら「きょうはラジオはないのか」「怠けるなよ」「真面目にやれよ」などの声が飛んでくる。それほど母国の近況が待ち遠しかったことであろうし、枯渇した人の心をどれだけ潤したかを思う時、楽しくもあり、喜しくもあった。

さて、このラジオであるが、その間、約１５年にわたり、新聞事業を始め、あらゆる面において貢献して来たわけだが、“最後”は全く記憶にない。恐らく寄る年波と共に廃棄処分になったものと思われるが、数々の想い出を残したであろうわが家の遺産として愛着を禁じえないものがある。

父は、東京在の椎野豊支局長との書簡の往来によって芸能人の招聘に成功した。

第１陣は東海林太郎、小唄勝太郎、三味線豊吉、篠田実（５１年１月）など一行６人、第２陣は古賀政男、同丈晴、市丸、藤原千多歌、広沢虎造など（同年６月）一行８人。戦後初の「芸能使節」としての導入である。

興行は成功した。会場はコンソラソン街のオデオン座（今はない）を三日間を借り切って昼夜２回を超満員にしたのはコロニア興行界有史以来で、入場料も幾許かであったのか記憶に乏しく、価値修正をしないと判からないが、安いものではなかったと思う。コロニアの皆様に貧乏させたことを思うと、申し訳ないことをしたという“ざんげ”だけが残ったことである。

第１陣は、銀行の負債を一気に解消し、よせばよかったものを、

続けて第2陣の招聘に向かってスタートした。前記8人の大芸能団の公演である。第1陣より二人多いだけだが、素人の悲しさで、費用が倍加することに疑義をはさむものがいなかった。即ち、第1陣のメンバーは質素だったが、第2陣は大御所古賀政男を始め、丈晴、市丸、ソプラノの千多歌など超一級揃いの豪華版であったことだ。

結果は、“夢よもう一度”は実らず、銀行の借金を元に戻し、「こんな水商売はやめような」とぽつねんと敏彦が言った。「しかし振り返ってみて、日毎の小さな力がこの一大事業（当時としては）を成し遂げたのだから、楽しかったじゃないか」と、溜息混じりの一言が、今なお耳底に残っている。

55年。ブラジル將棋連盟が結成された。寫眞は創立役員会のメンバーで、なつかしい思い出の1枚である。右から西山悟、森国博、岩崎岱治、三浦勉、山本勝造、中林武衛、新田健二郎、蜂谷專一、姓名不詳、山下明良、岸節美、木村岩男。

1955 Membros da diretoria da "Associação Brasileira de Shogui", perfilados nos degraus do "Bunkyo - Sociedade Brasileira de Cultura Japonesa". Da direita para a esquerda: Satoru Nishiyama, Kunihiro Mori, Taiji Iwasaki, Tsutomu Miura, Katsuzo Yamamoto, Takee Nakabayashi, Kenjiro Nitta, Sen-ichi Hachiya, Ignorado, Meiryo Yamashita, Sadami Kishi e Iwao Kimura

父は、前記の日本芸能団の招へいと平行して、コロニアの忌まわしい相克の防波堤たらん一という決意の下に、将棋の導入を計った。その第一歩は、日本将棋連盟との交流であるが、面識のあった時の名人・木村義雄氏との書簡の往復によって、即刻実現した。内容は、「分布状態も全然知りません。何もかも未知で、尊堂にすべてお任せ致しますので、よろしくお取計らい下さるよう……どんなことでも適宜にお計らいの上、事後承諾で結構ですから……当連盟の方は、私が全責任を負います……大成会後援、または私の名前をお出し下さってもいいのです。……」以下略の書簡を受取った父の喜びもさることながら、関係者一同がブラジル将棋確立のため委員会が創設され、パウリスタ新聞主催、大成会（後の日本将棋連盟）後援のブラジル将棋名人戦がスタートした。

コロニアにどれだけの有段者がいるのか皆目分からなかった頃で、大会様式から、大会開催まで細部にわたって、毎日紙上で煽り、４８年に第１回大会が催された。

意外なことに、この第１回大会の優勝者が、次兄・次男であったことである。

これによってコロニア将棋界を把握することが出来、同時に連盟結成の機運も高まることから、趨勢のおもむくまま、山本勝造氏を会長に推戴して大成会支部の認可のもとに５５年「ブラジル将棋連盟」の誕生をみるのである。１０年後の大会最　盛期には同好者３６０人が動員された記録が残っている。

また同好者の賛同もあって実戦解説を日毎紙上に発表したため読者は急増した。

５年後には８００部と推定された。推定とは、同好者のみならず、同時に「東京ラジオ」のエッセー風の“母近”（母国近況）が人気を博し、この方の読者も漸増したからである。

その間、年と共に回を重ね、第３回を除いて、第１３回大会まで次兄が王座に君臨できたということは、コロニア将棋界の実力がいかに低かったかを物語っているのである。当初の大会は、予選を勝ち抜いた上位者が名人に５番勝負を挑む挑戦制度であるが、２日間の悪戦苦闘の末、頭を休める暇もなく、くたくたになって、２日間を傍観して新鮮な頭脳の最強者に対したのでは明らかに不利。そこで当然考えられたことは、

名人も予選から参加するという選手権制をとり、次の全伯名人優勝者一覧表（２０７頁）で見るように、めくるめく若年層の台頭と相待って今日の隆盛を迎えている。その他の棋戦「王将戦」「最強者戦」「老中棋戦」などが、その後に続いて花開き、連盟主催の４大会があるが、父のペン・ネーム“老中”を冠した老中棋戦は、“老中先生の遺徳を永遠に偲ぼう”という意から逝去した翌年に創設された。

父は「下位者にもタイトル戦に参加できるチャンスを創りたい」と常々洩らしていたというので、対局法は駒割制となり、“下位者からタイトル獲得者出でよ”を謳ったが、第３２回大会の今日まで、その悲願は達せられていない。

９７年ブラジル将棋連盟（内海博会長）が名人戦５０周年を盛大に催した。集まったもの僅かだったが、過ぎ去った茫々の思い出話に花が咲いたことはいうまでもない。

父も遠いあの世から温和な微笑を浮かべ、後輩の成長を見守っていることであろう。それに伴ってブラジル将棋連盟のため推進役を務めた諸先輩はことごとく幽明界を異にしているが、ブラジル将棋も半世紀を迎えたのである。

父は、５８年、軽い悩溢血で倒れ、第一線を退き、余生は、ペンを執ることもなく駒を握ることもなく７１年老衰のため享年８０で

没した。

これで「老生閑話」と「東京ラジオ」を終りたいと思う。父は書く意欲はあり、その後もペンを執ることもしばしばだったが、同じ文章が重なったり、時間の観念がなく、姓名、地名などに不備の点が度々であった。これは軽い脳溢血の後遺症であったろうか。それで「紙上に載せるのに忍びなかった」（敏彦）のである。

代々名人制を廃し、実力名人制を採用した４９年、日本プロ将棋初代名人位を獲得した木村義雄名人が父・武衛に送られた揮毫「福寿」はその筆力から当時の将棋界を席巻する意気込みが感じられた。

ある日、ある時、父と。
Aru hi, aru toki, chichi to.
Um dia, num momento com meu Pai

長兄・敏彦

長兄・敏彦は、頑健な体躯に恵まれ、酒は浴びるほど呑み、人のいうことを余り聞かず、悪くても胸に収め、良くても驕るでもなく、有名人との交わりを持たず、コロニア及びコロニア人を愛した。特に観察眼は鋭く、人は“勘ちゃん（本名よりも勘太郎という

綽名で有名）の心眼”といった。

スポーツをたしなみ、野球は粗けずりであるが、草創期の全伯大会2度のリーディング・ヒッターは、コロニアの若きアイドル富ちゃんこと、竹田富男氏と肩を並べ、オール・サンパウロ軍の双壁といわれた。後にサンパウロ・クラブの監督を務めたこともあり、繊細な面も持ち合わせていたのであろうが、“名選手必ずしも……”で、いい結果を招くことはなかった。

MEMBROS DA FAMÍLIA NAKABAYASHI

Masao Nakabayashi

60年ごろの“中林家の人びと”左から右へ前列：昌夫、由起夫、レダ、すえ、武衛、ふく、芙美。中列：順、梨枝、謙、香、千枝（前）、奈々子、秀、菊枝、敏彦。後列：次男、克明、真理。

1960 Família Takee[16] Nakabayashi, no jardim da casa de Toshihiko, por ocasião da primeira ida deste ao Japão. Da esquerda para a direita, na frente: Masao (filho caçula), Milton "Yukio", Leda Reiko, Sueli, Takee (patriarca), Fuku (esposa) e Margarida Fumi. Na fileira do meio: "Wilson" Jun, Lie Lyria, Ken (nora) com Raul "Kaoru" (colo), "Marta" Tie (à frente), Nanaco (nora) com Edson Hide (colo), "Alice" Kicue (nora) e Toshihiko (primogênito). Atrás: Tsugio (segundo filho), "Cláudio" Katsuaki e Suzana Mari

戦前、伯刺西爾時報、聖州新報、日伯新聞などの記者を経て、戦後、日伯毎日新聞の創刊から編集に携わり、“新聞作り”に意欲を

燃やしたが、病躯の竹内秀一社長の後を継いで社長職に。爾来、経営難の台所を切り回して４０年、州政府、日本政府の叙勲に対しては「要らない」の一点張りで、「人間一匹、秤で計られてはかなわない」と首を横にふり、日本のある宗教団体から封筒が回ってきても、遂に開封することなく、お引き取り願ったのだが、後の述懐では「のどの奥に手のあることを知った」そうである。

紙代のヅプリカタの支払いには一カ月の猶予があるのだが、既に期限の切れたものが１０枚も溜まると、支払いも現金同様で、注文と同時に一と月前の１枚を決済しなければならない。支払いの“めど”もないし、あす発行の紙もない。問屋からは、いつもの事で、きょう中に払わないと紙は送れないと言ってきている。いつもの“最後通牒”である。頼りは、銀行攻略であるが、この筋も、いずれもエスゴタードで、遂に高利に手を出す。１５時を回っても、指定の場所には現われない。疲れた足どりで（と、みえた）現われたのが１６時過ぎで、その第一声は、「昌夫よ、首尾は上々だったが、実はな……」と来た。予感は凶である。「今そこで、弓場に会ってな、持ち合わせはないか、というので、出してしまった……。何とかならないか」と物静かにいう。「何とかならないか」はこちらのセリフなのだが、時間は切迫して、一刻の余裕もない。まず5、6人の友人を電話口に呼び出して、「おい、持合せはないか、あったら、すぐ届けてくれ」。後日談になるが、友人たちから、“届けてくれ”とは、どういうことか、と問い詰められたので、一部始終の披露に及び、許しを乞うた想い出は忘れられない。この友人たちの基金は、ヅプリカタ額面に満たないため再度、紙問屋と電話交渉である。

「足りないので、残りはあす届けるが、取敢えず、あす発行でき

る用紙を送ってくれ」
「幾らあるのか」
「半分だ」
「よし、今すぐ届けてくれれば、１８時に倉庫を出る最終トラックに貴社行きの紙を載せる。約束する」。
この“約束”を信じることの出来たのは、何１０回となく、最終便のトラックに載せてくれた職員の真心に手を合わせることが出来たし、黄昏どきに数トンの用紙を降ろされる情景をみるときは、決まって口ずさむのは「見よ東海の空あけて……」である。爽快であった。
例え半分であろうとも、払わせるのが商法といわれるのだが、この“やりとり”は、長い間、何１０回と繰返えされたことは言うに及ばないが、全く薄氷を踏む思いの毎日であった。
序でといっては失礼だが、この問屋はスウェデン系の会社で、新聞用紙を取扱う5社の中の1社で、連邦政府の監督下にあって、新聞用紙の入手に要する手続きから、高級紙、薬剤、機械輸入についての手続きなど一切の協力を惜しまず、1から１０まで、手を取ってアドバイスを受けたことしばしばであった。またプロテストをしない。後の運営面に、支障を来たすことであろうという親心であろうか。わが社は、たまたま支払い遅延で堪忍袋の緒を切られたのであろう、プロテストもしばしばであった。
前記の新聞用紙とは、輸入紙のことで、“新聞以外の使用まかりならぬ”といって厳しく規制されているのだが、新聞事業を援護するため国産品より良質で、廉価で提供してくれる制度で、ほとんどの同業者は、この恩典に浴している。
ある時、輸入許可の件で、ブラジル銀行リオ本店で手続きを済ま

せた帰りに、あいさつ方々、リオ本社を訪れたとき、職員の私に対する接待方が悪いといってお叱りを受けていたのを目撃したことがあったが、これが社是というものであろうかと思い、わが社も、いつの日か、そうありたいと思ったことであった。

ご存知の向きもあろうかと思うが、(それほど有名なので)、威張れたことでもないが、武勇伝の数々がある。

“虫が好かん”とよく言われるが、兄・敏彦が“好かん”ということになると、常識で到底考えられないほど、どんな理由があろうとも、徹頭徹尾、何が何でも妥協しない。それは全く狂的で、紙上にも顕れることがあるというから、これが狂的でなくて何であろう。遂には家庭内に及ぶ場合もある。突っつく、歯ぎしり、態度に現わす、顔に出す、など。

ある時、H亭で、彼奴がそこにいるということだけで気に入らず、「酒が不味い」といって彼奴を窓から外に放り出したことがある。問題にするに足る“彼奴”ではないのだが、そこが狂的なのだ。彼奴も「俺の金で呑んでいるのに、なぜ俺が……ツいてないなあ」とボヤいたという。

エピソードは尽きないが、善悪に拘らず、長々と書くべきではないので、この辺で、筆をおきたいと思う。ただ一つだけ、家庭を顧みなかったということを耳にしたことがあるが、一人の立派な社会人が家庭に後顧の憂いなく思いをはせていた事実を見て来たし、その誤解を是正することに躊躇することなく、ここに付記しておきたい。「彼は、激動の中で、強力な精神力と研ぎ澄まされた判断力で、常に彼自身の持つ正義感の強い一つのイデオロギーを頑なに曲げることなく押し通してきた人である」(「ブラジルの茨城」小林操氏記)。

後年、糖尿を病み、完全失明し、９２年９月１８日死去した。７

7才だった。妻・菊枝と5人の子供を残した。長女・草原真理、次女・佐野芙美、三女・浅見梨枝、長男・克明、次男・順。

茨城高等学校寄宿舎第2寮時代の西郡郡友会卒業生送別会。
於・水戸偕楽園。最後列左から3人めが敏彦、右上の円内も。（1932年ごろ）。

Passeio de confraternização dos formandos do Alojamento do Distrito Oeste do Colégio Ibaraki, na despedida da turma de 5ª Série. Toshihiko é o antepenúltimo, da direita para a esquerda na última fileira de trás; o professor é o de chapéu no centro. Local: Parque Kairakuen (um dos três jardins mais famosos do Japão), em Mito, capital de Ibaraki (ano 1932)

兄は60年、渡伯後27年目に初めて訪日の機会に恵まれた。茨城高等学校在学中、野球をたしなみ、友部町あたりで学友を集め

キャッチ・ボール、他流試合には正選手として内野手を務めたという。

幼少の頃、同郷の飛田穂洲先生の野球評論を読んで憧れ、アマ野球の確立を説く先生の情熱に陶酔し、この日、偶然にも涸沼湖畔に穂洲庵を訪ねた時、六大学野球解説者として名声を馳せ、学生野球往年の打撃王といわれた河合君次氏を交えて、草創期の“コロニア野球”を夜の更けるのも忘れて談論風発の一刻を過ごした。

先生は早稲田野球部監督時代は、試合の日には、ベンチに座ることなく、ネット裏で静かに観戦したという。「すでに教えていること、野球は君たちがやるのだ。成果を出せばいい」を旨とし、プロ野球をみないという堅物のところもあったが、後年はプロも見たという。

河合氏は、５８年5月ベースボール・マガジン誌の特派員として、また、６０年１０月産経新聞特派員としてローマ五輪取材の帰途と2度来伯している。恐らくブラジル野球界が初めて“ベースボール”の手解きを受けた恩人であり、日伯野球交流の輪を拡げた最初の人である。後年、東京に住居を定めていたが、その晩年を知らない。

５８年7月に早稲田大学野球団来伯、監督は水戸一高出身の石井連蔵氏で、１５戦全勝という野球誌史に残るような５８×０という記録で安打１９本、２塁打6、３塁打1、本塁打４本という1戦があったが、当時のコロニア邦字紙には、“竹槍と大砲”の違いという評が躍った。

写真（１９５頁）の掛け軸は、先生の直筆だが、死ぬまで自宅に掲げ、心のやすらぎを覚えたという。その他に「洗心」「球心」「球道洗心」などの小旗２０本を“ブラジルの球友へ”として贈られた

が、全伯地方対抗選抜野球大会（後のセンバツ野球大会）の会場マストになびかせて先生の偉大さを仰ぎみたという。

当時、全伯には小球場はあれども、この種の全伯大会を催す球場はなく、大会の地方巡回のファンの熱望に応える術もなく、サンパウロ市のみで開催されて来たが、年を重ねると共にファンの要望の高まりによって、地方大会開催を決議し、その入場料１００％を球場建設に充てることを条件に、各地方委員会に渡し、７年後にはコロニア主要都市に一大球場がお目見えしたのである。

この催しは、苦しい台所を切り回す収入源の一端であるが、それをポイと無償で渡し、喜怒哀楽の表現など出来ないが、心の底から何物かを訴える“叫び”に心を奪われたといわれる。

飛田　穂洲　とびた　すいしゅう（１８８６～１９６５）

野球評論家。東茨城郡大場村（現・常澄村）の生まれ。本名は忠順（ただはる）。

水戸中学校（現・県立水戸第一高等学校）時代から野球に入り、三塁手として活躍する。１３年（大正２）早稲田大学法学部を卒業、

１８年読売新聞社に入社、野球評論などを書く。翌年、早稲田大学野球部監督となる。２６年、朝日新聞社に入社、野球評論、随筆などに健筆をふるい、学生野球の父とたたえられた。「ベース・ボール攻撃編」「ベース・ボール守備編」など著書多数がある。６１年、野球殿堂入りした。（茨城県大百科事典から）

（２０２～２０６．ポ語）

次兄・次男

次兄・次男は、幼少のころから病弱で、過激な運動ができず、麻雀、将棋、囲碁などに長じ、頭脳もその方に発達したのか勝負事は抜群に強く、雀友たちからボイコットされたとか。特に将棋については、父・武衛の指導を受けたかどうかは知らないが、一枚落ちから指していたようだ。

太平洋戦争の終結を期に、あの忌まわしい相克の間で、当然考えられたのは、真実を報道できる邦字紙の発刊であった。かくして４９年１月紆余曲折の末、サンパウロ新聞、パウリスタ新聞に次いでコロニア戦後初の日刊邦字紙「日伯毎日新聞」（竹内秀一社長）の発刊となった。

当時は、見出し用の大文字活字がなく、一本一本木を彫って代用した。また本文用の９ポイント活字は手動鋳造機で補充したが、写真は真黒けで、半世紀前の輪転機では、見るも無残な紙面が現出した。“毎日”とは、コロニア有史以来の“日刊紙”をうたったもので、創刊号に対する期待の歓声は、号泣へと代わったという苦い想

い出がある。

まず、将棋によって、コロニア明朗化の先鞭とし、続いて野球大会、川柳大会、博物研究キャンプなどが開花した。

父は、面識のあった時の将棋名人・木村義雄氏との文通によって大成会（現・日本将棋連盟）ブラジル支部の認可を得て、全伯大会がスタートした。当初は、コロニア全体の実力が解からないため連日のように紙面を賑わせたが、驚いたことに、第1回大会の優勝杯は奇しくも次男が獲得したことであった。第3回大会を除き、通算12回優勝の記録を樹立し、コロニア将棋の弱体ぶりをさらけ出した。

この優勝者一覧表を見れば解かるように、アマ将棋の実力というものは勝負の厳しさもさることながら、1段位の差があっても5番が5番勝ち抜くということは出来ないものだが、13年もの間、この牙城を抜くものがいなかったということは、優に2段以上の格差があったものと思われるのである。

将棋は、勝負を通しての娯楽であり、近ごろはジャナリズムの花形にまでのし上って来ているが、ざっと数えて、日本の人口が1億2000万の半分6000万を男性とみて、その半分の3000万から子供を除いた1000万人が将棋を知っているだろうといわれるほど庶民の中に溶けこんでいる健全な趣味でもあるので、コロニアでも指す指さないは別にして、この大会に注がれる興味と関心は大きなものがある。

56年、妻・律子を亡くし、心理的に、いつまでも将棋でもあるまいということから、引退を決意した。「人生と勝負」に当時の心境を書残している。

第１４回大会で、日本の前田克俊アマ名人に敗れて現役を退き、後進に譲るのであるが、その間、山本勝造ブラジル将棋連盟（５５年６月１日の創設）会長在任３０年と、父「コロニア将棋」確立のため紙上にて健筆を振るい、岩崎岱治、新田健次郎、木村岩男（いずれも故人）などの奔走によって今日を迎えているが、９７年８月の大会は、第５０回と回を重ねるのである。その節目を、内海博会長（当時）によってコロニア将棋半世史が綴られた。「ブラジル将棋連盟創立５０年記念誌」が刊行された。全く感無量である。

この小誌は、子供、甥、姪たちの希望による私家版遺句集で旧友・遠田七郎、若松孝司、大原友重、山根剛の諸氏から追悼文が寄せられた。特に日伯毎日新聞初期の編集長・八巻培夫氏が序文と二世諸氏の俳句の理解を深からしめるため、３００句に適切なポ語訳を付してくれた。心臓のバイパス手術後にも拘わらず、快く引受けてくれた労に感謝したい。

氏は、岩波菊治、武本由夫氏らに師事し、若いころから短歌を作った。「コロニア詩文学」詩歌壇の選者を務める、斯界の指導者の一人で、日伯両語に卓越している。啄木の熱烈なファンで、啄木歌集のポ語訳ほか数冊の訳著がある。８６年、常陸宮ご来伯の際、

実戦から遠のいて、
後輩の指導に専念する次男。66年頃

Tsugio dirige uma partida de shogui com pessoa de menor graduação 1966

椰子樹とパウリスタ新聞共催の第３８回全伯短歌大会の題詠「皇室」に次の作品で第一位を獲得した。

激動の昭和を生きて
天皇の表情穏（おだ）し
海の如くに

この短歌は総領事館を通じて、滞聖中の常陸宮ご夫妻に献上された。また、同大会代表選高点歌でも、次の作品で第一位になった。

さえずりの音色たくみに
吹き分けて
盲人（めしい）はひさぐ
小さき鳥笛

小誌の題名については、俳句は初歩の域を出ておらずということから、次女の島袋礼子レダによって「俳句の試み」Ｅｎｓｏｉｏｄｅ Ｈａｉｃａｉと名付けられた。次兄のかくれた“ことども”を知るよすがともなれば幸いである。

次兄・次男は、将棋から引退後、囲碁を嗜み、何回目かの全伯囲碁大会に優勝して五段位を受けている。晩年は俳句を試みながら、８８年1月３０日心臓麻痺で死去した。

７０才だった。次の５人の子供を残した。長女・平塚千枝、次女・島袋礼子レダ、長男・由紀夫、三女・新垣すえ、次男・香。

この子供たちが、父母共に兄妹で、血の濃い、いとこ達と結構仲が良くない。もつれの原因は、他愛のないものであったろうが、３０年というのは余りにも永すぎる。父や母となって大人なのだから、ここら辺りで、過去を不問とし、笑って手を握り合う度量を培ってほしいと願う。

ブラジル棋院主催の第23回ブラジル囲碁名人戦における烏山久夫6段との優勝戦の一スナップ。この年、5段位を受けている。囲繞する観戦者の中に何人健在なのか、幽明界を異にし姓名も定かではないが、宮城松成、吉川一、大原友重、滝井康民、安良田済、本坊秀喜、古川清、又吉などの顔が散見できる半世紀前を振り返る貴重な一枚である。写真の提供者は、三浦左五郎氏で当時から写真業を手広く経営している。棋力は現在も実力4段の腕前である。

Uma cena da partida final entre Tsugio e Hisao Uyama, 6º dan, no 23º Torneio de Mestres do Igo do Brasil, realizado no Brasil Kiin. Nesse ano, ele recebia o 5º grau. Dentre os espectadores que os cercavam, não sei quantos ainda estão com saúde (se é que estão vivos) e também não tenho certeza dos seus sobrenomes. Entre os presentes, reconheço Shosei Miyagui, Hajime Yoshikawa, Tomoshige Ohara, Komin Takii, Sumi Arata, Hideki Honbo, Kiyoshi Furukawa, Matayoshi, entre outros. Esta foto é uma preciosidade, por permitir-nos ver esses rostos depois de tantos anos.

末子・昌夫

私の本籍は、茨城県西茨城郡岩間町押辺となっているが、私達３人兄弟は、母の実家、２万石の城下町、福島県は磐城郡平町（現いわき市）で生まれた。

３３年渡伯、同年、日本新聞社（翁長助成社長）にオフィスボーイとして入社、新聞折り、週一回の新聞配達から解版工、活版、機械工を経て、発送部に読者の宛名書き。ここでようやく日本文字に接するのである。

その後、大正小学校夜学部で、日語にはげむが、太平洋戦争ぼっ発で、日語校が閉鎖される。戦中は、父の「東京ラジオ」を写し、そのコピーを知人に配布して喜ばれ、日本文字を書くのが面白くなった。これは終戦まで続くが、パウリスタ新聞社に入社間もなく大先輩の伊藤氏が編集人の原稿を持ってきて「これ読めるか」「読めない」「字が解かるか」「解からない」「困ったな、取り敢えずやってみろや」と言って、見出し用の大文字活字を拾うことになった。即ち文選工のはしりである。それが一年後には、先輩諸氏には及ばないが、一人前となって、重宝がられた。終戦直後の工場技術者の払底時代といわれたが、私にとっては、一つの出会いで、日毎創刊発行準備に役立つのである。

当時は、最高の工場技術者といわれた次兄・次男を扶けて、工具のない（主に活字）やりくりの何年間は、全くの苦闘であった。どこから集めたものか知らないが、号数、ポイント数活字が入乱れて使用されるため、一行の見出しを作るのに３０分を要し、翌朝の３時、４時になっても版ができずに、泣きを見ることしばしばであった。

５１年頃であろうか、記憶に乏しいが、Ｍ氏の手動鋳造機を駆使して１０万本の９ポ活字製造に全力を上げ、同時に最新式自動印刷

機の購入に踏み切ったのである。紙面まパッと明るくなり、全社員快哉を叫んだ晴々とした顔、顔、顔が眼にうかぶ。過日、八巻氏宅で当時の編集スタッフの写真を見て、健在であるのは、本人の、八巻培夫、水野昌之、加納克巳の３氏位で、過ぎ去った茫々の半世紀を再確認したことである。

その後も経営面の苦闘は延々と続くのであるが、理解のある商社、友人、知己から励まされ、零細企業の経営について教えを受けながら永い永い“この道”を歩んできたが、“不義理多かりき”で、披露するまでもなく、この機に及び皆様のご好意を謝し、厚く御礼申し上げる次第である。

５９年結婚、長男・秀は小工場を経営し、３人の子育ての最中。長女・エリゼは医科を卒え、東奔西走の毎日であるが、私たちにとっては二人とも過ぎたるものと感謝の念で一杯。

９３年、訪日中の妻・奈々子が糖尿病の悪化で、浜松労災病院に入院し、闘病生活１．９年後、小康を得て帰伯できたが、当初の高熱と激痛による後遺症で、足腰が立たず、車椅子の厄介になって、不自由な毎日をかこっている。私も同病院で９３年左頚に小まり大の出来物ができ、腐って膿を持ち、悪臭を放ち、見るも無残な容態が続いたので、医師の説得に従って切開、９４年、前立腺肥大、９５年胃潰瘍と相次いで大手術を受けた。若いころから病気を知らない二人にとって痛恨事であった。病気を知らないということは、病気にはならないという強い信念は、年令とともに、もろくも崩れるということを知らなかったことである。

次に、我が家の歴史に大きな影響を与えて下さった大山康晴先生、栗原信・画伯、後藤武男・茨城新聞社長、そして偉大なる野球の飛田穂洲先生の霊に心から敬意を表して、この稿を終ります。

人間　大山康晴名人

大山康晴・将棋名人は、小学校を卒えると木見金治郎門下に弟子入りする。当時は、毎日が買物、掃除、風呂沸かしの明暮れで、でつち奉公同然であった。何年後か、初めて先生から、「一番指そうか、といわれた時の嬉しかったことは忘れられないが、その時は、もう私の方が強かった」と述べている。

名人は先輩に恵まれた。升田幸三、大野源一、角田三男民ら、当時の将棋界の指導的な先輩と対局できたことである。有名な升田幸三６段には、２枚落ちから手解きを受け、後の同門決戦は約２０年間にわたり、棋界を２分して戦われたが、その頂点に立ってからは、群がる強豪を薙ぎ倒し、優勝回数１２４回と前人未踏の記録を残した。

私は、７４年１０月ブラジル将棋連盟の全権としてブラジル訪問の招待状を持参したのが、初会見であるが、ちょうど日本将棋連盟東京会館建設中で、募金活動に奔走中の一刻を割いての訪伯を受諾された。話し中、同席していた建設委員の米長邦雄８段の機嫌が悪く「この忙しい時に……」というのが耳に入ったが、それを押し切っての決断であった。Ａ級順位戦たけなわで、中原誠名人への挑戦権が獲れるかどうかの瀬戸際であったに拘わらず、訪伯は、翌年の名人戦２週間前と決定した。

名人は多忙な人で、一と月の半分を日本国中旅をしている。招待されると、どんな小さな棋会にも顔を出して交流を密にする。その中間で連絡に務めるのが昌子夫人で、私の場合も、いつも在宅していたことがなく、「この次の帰京は何日です。確認して連絡します」ということになる。

先生は、対局日専用の手帳を離さない。棋戦名、対局者名、と

き、ところが克明に記してある。衆知のことと思うが、対局日に３０分遅れると、その３倍の１・５時間が考慮時間から差引かれ、２時間も遅れるものなら持時間６時間の時間切れとなって、不戦敗の極印を頂戴する。“将棋のドラマは秒読みの中で生まれる”という言葉があるように、プロ棋士の頭の中には、盤側の時計（時間）との熾烈な戦いが、棋勢の変化と共に展開されている。何１０盤という変化の読みに優るのが勝利者で、反対の場合は、段位は下がらないが、負け越して順位が下がると、１／３また１／２に減俸されるので、声を大にして泣くという。大袈裟だが、それがプロの厳しさというものだろう。

先生は、対局のスケジュールの間を縫って、懸案の日本将棋連盟東京会館建設に奔走し、現在その威容を誇っているが、休む暇もなく、関西将棋会館を大阪に完成した。何れも先生の努力の賜として燦然と輝いている。不撓不屈の精神がこの大事業を成し遂げたと思えるのである。順位戦またしかり。

８９年悪性ガンに見舞われて倒れ、３回の大手術にも拘わらず病躯を推して対局を続けたのである。９２年７月２６日遂に力尽きた。享年６９。振返ってみて、升田は“攻め”大山は“受け”に強いとか、升田は“動”で大山は“静”だと、ある評論家が評したそうだが、私は、全く反対であろうと思うのである。

８５年、私ら夫婦が、御殿場の別荘に招待され、２日間のおもてなしを受けたが、夕刻より俄かに曇り、富士の秀峰を見ることは出来なかった。夕食後の飛香落戦は、１番は惨敗したが、２番目は、引き角から香を上げ、これを飛車が援護して１筋に飛車が成り込んだ時は、内心“勝った”と思った。その時わが陣営は金銀４枚でやぐらに組み無傷の状態であった“筈”なのに、いつの間にか、一枚

一枚剥がされ、裸にされた時は、全くガックリであった。先生とは通算５局教えを受けたが、勝った記憶はない。

長き夜を
たたる将棋の
一手かな

露　伴

７７年沖縄の戦跡を訪れた。私は、日本は生まれただけの国なのに、弾薬、飛機、軍艦、食糧の欠乏した中で、故国のために戦った同胞の憂愁な眼をみた時、糸満の最南端の絶壁から波打際を見下ろし、しばし日米戦の最後となった古戦場を偲んだ。

４カ月の戦闘の結果は、焼野が原と１０万の将兵が玉砕し、生き残ったもの３％（軍人）と非戦闘員が兵隊と一緒になって戦ったため、犠牲者を倍加させたといわれる。

ここに鎮魂歌がある。この尊い御霊を忘れないために、以下転記して心に焼きつけておきたいと思う。

南海の鎮魂歌

風哭き波は語るべし
驚天裂地の惨劇を
血潮は海を紅に
絶叫天に空しけれ

母掻き抱く嬰児の
澄みし瞳に映りしは
艦砲射撃の閃光か

戦く恐怖の死の影か
若き兵士は故郷を
南洋桜に偲びしと
あわれ悲しき心根よ
恨みは尽きじ永久に

総てを知れるこの海の
潮騒何を語れるや
水底深く消え行きし
いのちに涙尽くるなし
噫　遣瀬なきこの想い
沈めし一基の地蔵尊
無限の愛の眼差しに
永久の痛恨を救えかし
逝きし御霊を救えかし

山本勝造随想集「ブラジルと６１年」から。

栗原（くりはら）信（しん）画伯

同郷の栗原信画伯の歓迎会での民謡の一くさり「磯節」の披露には、全員ほろりとさせられた。本当は、そんなに巧くないのだそうだが、それなのに、何か人も一寸ばかり、引き付けられたという。お別れには、すらすらとスケッチして県人、一人ひとりに“よろしく”替わりにといって配られた。その一枚が同僚、友人でもある八巻培夫兄宅にある。

５７年３月、サンパウロ・ビエナル展日本代表審査員としての来伯であるが、終わって、アマゾン、サルバドル、ペルー国などに約８カ月にわたって滞在し、アメリカを回って帰国している。そういうことからブラジル題材の絵が多い。

１６年、二科展初入選、２７年、太平洋画会初出品、２８～３１年、パリ留学、４４年、二科会を解散して４７年、二紀会を創立、５０年、新潟大学数授、６１年より数回ヨーロッパ、中近東、中南米などを写生旅行。代表作に単色だが「ユーカリ並木」、「しぐれる米山」（５４年）がある。

１８９４年３月２４日、茨城県は石崎村上石崎の筑波山ろくで生まれ、６６年７２才で逝去した。

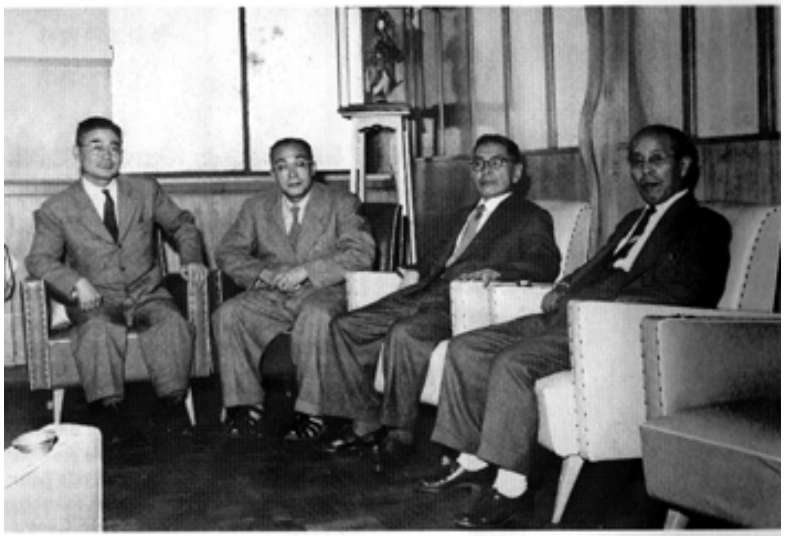
後藤（ごとう）武男（たけお）

１８９３～１９７４

茨城新聞社長、岩井市出身。

１６年（大正５）慶応義塾大学政治学科卒業、同新聞科修了の後、時事新報社政治部に入社、１９年ワシントン特派員として渡米、第１回国際労働会議を取材、８時間労働と年少労働者の年令制限、女子労働者の深夜労働禁止勧告案など報道し、国際的記者として評価をうけた。２１年、時事新報社ロンドン特派員として皇太子殿下に随行収材、数々のスクープとエピソードを残し、同年ワシントン海軍々縮会議取材のため渡米、２３年同社編集局次長、４７年茨城新聞社取締役社長、翌年、日本新聞協会理事、共同通信社理事、５２年、パリの第１回国際新聞編集者協会総会、５４年ブラジル第１回世界新聞団体会議などの日本新聞界代表として出席、７４

年茨城新聞社会長。



写真は、54年、来伯時、「つくばね会」（後のブラジル茨城県人会）における歓迎会の一コマ。右より根本重義、中林武衛、後藤武男、瀬尾武右ェ門の諸氏。いずれも故人。

1954 Recepção a Takeo Goto em visita ao Brasil. Um snap shot tirado na "Tsukubane-kai" (posterior "Associação Centro Social Ibaraki do Brasil"). Da direita para a esquerda: os srs. Shigeyoshi Nemoto, Takee Nakabayashi, Takeo Goto e Buenmon Seo (todos falecidos)

あいつに逢いたい

校庭に入って右側に大樹があった。その樹の下で同級のあいつと取っ組み合いのけんかとなり、始業ベルが鳴っても気づかず撲りあいが続き、泥にまみれて、しばらく樹の下にたたずんでいた想い出がほうふつとする。教室にすべり込んだ時には、あいつは教壇に立たされていた。私は血だらけだったので、帰宅を許されたが、けんかの理由は、もちろん記憶にないが、あいつは俺より強かったようだ。

あいつ、どうしているだろう。逢ってみたい。

私は、この幼稚園に通ったのが、３０年ごろで、約７０年という年月が過ぎ去ったのであるが、訪日のたびに、今度こそは、今度こそはで、今だにこの門をくぐっていない。

この常陸太田は、水戸光圀（義公）公が、西山荘に隠居して、大日本史を監修した。また、講談だが、助さん、格さんを連れて水戸城下を漫遊した「水戸黄門」５６分ものビデオが人気を博したのも遠い昔ではない。実際には水戸佐竹大藩を見張った使命とされる。家康の第１１子（末子）頼房の第３子で、７２才で没し、水戸徳川歴代藩主の墓所「瑞竜山」に葬られた。

さて、私たちの、ふるさとであるが、上野駅に足を踏み入れると、「エ」と「イ」の発音がごっちゃになって耳をさすり、東北の甘く、重い訛が鼻をなで、“ふるさと近し”を思わせる。「汽笛一声新橋を…」で発車、特急で水戸まで1時間という近距離なのだが、昔は一便乗り遅れると3時間ぐらいは待たされたが、今は出ると、すぐ次が横付けになるという時間表を必要としない一日２０便という時代。関東平野にぽつねんと聳えているのが、筑波山で、歴史の上でも有名だが、「ふるさとの山に向かいて言うことなし…」で、「きれいだなぁ」とつぶやいたら笑われた。それがまた無性に嬉しかった。終戦後、村に電灯が点いたのは、下から勘定した方が早かったというから推して知るべし。こういう所が“わが　ふるさと”である。

この４、５年の間に、親族４人ばかりを送り出したが、高令者は“順番”に入っているので、悲しいことには違いないが、若い者は“番外”で惜しいことをした、何とかならなかったものか、とい

う痛切さを感じる。度々このような話に及んだとき、ふと、前をみたら、誰もいなかった。それは最前列に立たされて「こんどはお前の番だよ」という声を聞いたような気がした。がぜん、子供や甥たちの態度が変り「こんどは・・・」の続編と相成るのでしょうが、老いては子に従え・・・で、それに甘えているような昨今である。

ふるさとは
お背戸に柿の
ただ一樹

まさお

翌朝眼が覚めたら、先生は将棋関係で、昌子夫人はゴルフで出張していなかったが、私らの鎌倉行きの予定を聞いて、その道順を詳しく書いたメモが卓上に置いてあった。

以上は、自家４０年の歴史であるが、余りにも膨大なため日伯毎日新聞４９年創刊号から抜粋し、優先的に日伯毎日新聞、県人、友人を中心に中林家の概略を綴ってみた。親兄弟を送り出し、残ったものは私ひとり。記述を確認する術もなく、記憶を辿るのもたどたどしく誠に無責任な話であるが、何の変哲もない、説得力もない雑記帳のようなものが出来上がった。子供たちにも申し訳ないが、一生懸命やったつもり。皆の座右に片時でも置いて頂けたら、こあ上もなく、ありがたく思う次第である。

３３年、日本新聞社入社、新聞配達を振出しに、新聞業１から１０までの経験を経て、４９年、日伯毎日新聞創刊に参加、７４年副社長を最後に８９年停年、９３年、訪日中に前立腺肥大、胃潰瘍を病み、浜松病院にて手術を繰返し、体調をくずした。現在養療中。元ブラジル将棋連盟会長、元ブラジル茨城県人会会長。

「カンちゃん」
コロニアを最も愛した男

（遺　稿）

山根　剛

近頃は、行き過ぎとも思える物質文明の進歩発達に鼻白むことばかりで、人間仕会の砂漠化が進んでいるとしか思えません。「過ぎたるは及ばざるが如し」ということにならなければいいがと杞憂しています。今の世の中で、こんなことを言っているのは時代の流れについて行けない古い頭の手合で、私は自らを「近世石器人間」と自嘲しています。

それでいて四六時中、馬鹿面をテレビに釘付けにしてＮＨＫの番組にうつつを抜かして文明の余慶に浴しているのですから世話がありません。こんな輩を天の邪鬼とかいうのです。お陰さまで日本の、未見の各地、特に常陸の風景がしょっちゅう登場するようになり、筑波山、千波湖、那珂川、偕楽園、又この頃新装なった高層の茨城県庁ビルなどが私のような他県人にも馴染みになりました。その都度亡きカンちゃんの面影がダブつきます。彼は茨城の産でした。

カンちゃんの晩年は実にさびしいものでした。永年の糖尿病で目はほとんど失明状態、脚は歩行もままならないほどに衰えました。一度として欠かしたことのない何十年も続いたタバ族生き残りの土曜日毎のアルモッソにも姿を見せなくなりました。

カンちゃんのいないアルモッソはお目当ての人気役者を欠いた芝居のようなもので一向盛り上らず、味も素っ気もないものになりました。

その後のカンちゃんは、家に閉じ籠もり、菊枝夫人に一から十ま

で世話を焼かせながら、本も読めず所在ないまま薄明の目をほとんどテレビにくっつけてビデオを見ていました。背中をこんもりと丸めた姿には遣る瀬ない寂しさが漂い包み込んでいるようでした。

往年、コロニア野球界をリードした大立者の面影も、粋筋で持てに持てた美丈夫ぶりの片鱗さえも偲ぶことは出来ませんでした。私は出来る限り、週に一度ぐらいは訪れて憂さ晴らしに四方山話、昔話をし、菊枝夫人の磯巻を相伴して帰るのが習いでした。「おめえ、もう帰るのか」と空ろな目で私の影を追う彼に暗然としました。今少し長生きして、いつも郷愁をにじませながら熱っぽく自慢していた郷土の風景をテレビーで見せてやりたかったとしきりに思います。心の渇きがどれほど癒されたことでしょう。

憧れの日本へは、社用や眼の治療で二度三度は行っていると思います。この外にも訪日の機会はあったのですが、他に譲って腰を上げようとしませんでした。億劫がり屋のせいもあります。「どうして」とたずねたことがあります。すると「飛行機が羽田の滑走路を離れる瞬間が、たまらん。日本のこの産土をこれからも踏むことがあるだろうか、と思うと胸が無性に熱くなり締めつけられるようでな…あんな思いは何度もしたくねえ」と遠い目をして言いました。彼は一見豪放に見えましたが、寂しいがりやで人一倍の感傷と繊細さが棲分けていました。

カンちゃんは、コロニアの誰からも愛されました。あの憎めない人柄が彼に接する誰彼をファンにしたのだと思います。

誇り高く、反骨で、照れ屋、口下手、気が短くて手が早く、お世辞が全然使えない、こう上げてくると短所ばかりで、これで損もしましたが、反面これが彼の魅力になり大きくプラスしました。彼が竹内秀一氏に協力して創刊し、後、主宰した日伯毎日新聞は地味で特ダネ記事も少なく派手ではありませんでしたが「コロニアの、コ

ロニアのため」の新聞に徹していました。いつも紙面にはコロニア良かれの思いが溢れていました。

奥地に巾広く根強い読者層を築いていたのも頷けます。

戦後、コロニアは勝ち負け問題で、二つに分れて同胞間で血みどろの修羅場を繰り広げて消耗しきっていました。この乾いたささくれ立った土壌に、逸早く故国日本から当時トップ級の芸能人を呼び寄せ、慈雨をもたらしたあの快挙は、当時としては勘定づくでは手の出る代物ではありませんでした。成算があったかどうか、彼のことですから大まかな計算で収支勘定を合わせたのだと思います。どうせどんぶり勘定で儲かったのか損したのか分ったものでありません。

その後、日伯毎日の経営が楽になったとも、カンちゃんが金持ちになったとも、大邸宅を建てたとも、買ったとも聞いたことがありません。死ぬまでアクリマソンの社長宅と言って、はばかれるような棟割りの陋屋でした。

彼は、コロニア野球の発展興隆にも並々ならぬ情熱を注ぎ、戦後沈滞気味のコロニア野球界に活を入れ、同時に技術的向上と刷新を念願して日本の大学野球チームの招聘のため大いに努力し、早稲田大学野球チームの来伯が実現したのであります。これが呼び水となって、日本からのチームが続々やって来るようになりました。その外、彼は野球に就ていろいろの企画をやりましたが、特に全伯地方選抜対抗野球（後のセンバツ野球）は最高のものでした。全コロニアを熱狂させました。彼は大きい足をしていましたが、コロニアに残したその足跡も偉大でした。しかし其の足跡はいまや時代の波にかき消され回顧するすべさえありません。

とにかく彼は、コロニアを愛しました。日本から来たあるタレン

トがカンちゃんと弓場勇御大をある料亭に招待しました。このタレントが、止せばいいのに、コロニア論を得々とやりコロニアを貶したらしいのです。カチンときたカンちゃんは、タレントを廊下に引きずり出し胸倉をつかんで一発食らわせたところ、勢い余って階段をころげ落ち、運悪くもお手洗いから座敷へ戻ろうとしていた弓場氏の足許にころがったのです。

御大は「カンちゃん、此奴殴ってもええんか」と関西訛で一応仁義を切って、やおら手に唾して張り倒したのです。前門の虎、後門の狼を地で行った模範例です。高い飲み食い勘定を払って殴られては間尺に合わない話です。

このタレントは日本へ帰って一年ぐらいで亡くなりました。「あのときの後遺症だぞ」とからかうと「まさか、でもそうかも知れねえな、殴ったときギャーキューと悲鳴をあげやがった、大体弓場が余計だったよな」とちょっと寝覚めの悪そうな顔をしました。これは数ある彼の武勇伝の中の傑作の一つです。

彼は、大勢の前での演説は苦手で、全然やりませんでしたが、仲間同士の四方山話では彼の独壇場でした。演説は下手だが座談は名人という人がいるものですが、彼はその最もたるものでした。知識が広汎で機知とユーモアに富んでいましたから、聞いていて飽きませんでした。特に日本の地理歴史については、実によく知っていて、舌を巻いたものです。博覧強記が洋服を着ている感じでした。一杯やって興が乗ると、低く口ずさむ唄もなかなか聞かせました。

しかし数字にはとんと暗く、天は二物を与えずとよく言ったものです。碁も将棋も大好きでよく囲んでいましたが、下手の横好きの好例で、コロニアの名人級だった二人の弟さんとは天地の差があったそうです。(私は碁も将棋も全く無縁でわかりません)。

麻雀また然り、ジャン歴何十年と古さを誇っていましたが、上

がっても計算が出来ず、いつもよきに取り計えでした。かく申す私も麻雀だけは好きで、ジャン歴はカンちゃんに負けず劣らずですが、上りの計算は専ら他力本願で、とうとう覚えずじまいでした。計算の出来ないのは何とも無様で、肩身のせまい思いをするものですが、一人でも同類がいると心強いもので、麻雀のときは二人いつも一緒でした。

いま、カンちゃんはあの世でどうしているでしょう。

生前酬われること少なく遣る瀬ない思いを抱いて、と思うのは下衆の勘ぐりかも知れません。案外そんなことにはケロリとして、冥土に呼び寄せた恋女房の菊枝さんに万事世話を焼かせながら相変らずの亭主関白ぶりを演じていることでしょう。そうあって欲しいと心から祈っています。

そんなカンちゃんを、私はこの上なく、いとおしく思えてなりません。

自己略歴

１９１４年鳥取県、米子市に生まれる。５才の時、先にブラジルに移住していた親父の呼び寄せで、母親に連れられて渡伯。８才の時、独り日本へ帰され、小学校と中学校の課程を終えて３４年再渡伯。４１年ブラタクに就職し、後にバストスのブラタク製糸工場に勤務。４９年同系の南米銀行に転属。以来銀行が９８年他人の手に移るまでの、殆ど半世紀をうだつの上がらぬまま、便々だらりと日を送らせてもらった。

銀行もよく我慢して使ったものだ。それにしても幾多の優れた上司と、沢山の良友悪友に恵まれた。カンちゃんはその最たるもの。これだけでも生き甲斐があった、と思っている。

追　憶

遠田七郎　　俳号　豊秋

永遠の旅路の彼方に在られる中林次男さんのことを、私は今思い浮べている。つくばね俳句会のメンバーのひとりであった氏のことを、仲間と折りに触れて話に出ることがある。忘れ得ぬ句友であった。

この度、故人の遺されたお子さん達の発意と叔父さんである昌夫さんの援助によって、記念の遺句集を作るという。これは親子の深い絆からであることは言うまでもなく、孝心の表われで稀にみる美しいことである。と同時に俳句という日本古来の伝統文芸、に対する興味と理解があればこそと思うのである。

８８年2月7日のつくばね句会報を見ると「中林次男氏追悼句会行わる」と記録されている。そしてその後書きに、私の悼む文が書いてある。それをこの稿に再録してみる。

「つくばね句会」の熱心な作者の一人であった中林さんが忽然、鬼籍の人となってしまった。

去る1月３０日の正午頃だった。県人センターの富田さんからの電話で、次男さんの訃の知らせであった。私は愕然とし、しばし耳を疑うほどであった。諸行無常とはいえ痛恨事で、何ともいいようのない気持だった。少し落ちついてから会員に通知をしたのであった。

次男さんとは、句会が出来る以前にも何度か会い、話などもしたことがあったが、句会が発足して間もなくのころ、俳句をやるようにすすめたことがあった。

氏は人も知る、将棋に卓抜な才を持ち、名人位の肩書きもあり、趣味豊かな人で、新聞編集の仕事もしており、俳句にも興味を持っていた。将棋の方の時間をさき、句会にも来るようになったのは、８５年２月の例会からだったと思う。その時に作った句に

夏　館

庭掃く媼

見て過ぎぬ

というのがあった。詩才と細かい感覚があったので俳句はできたのである。

最後の句会は小林農場吟行の座だった。今にして思えば　あの吟行の折は、何となく疲れ気味であったようだ。それでも楽しそうであったことはせめてもの慰めである。

あの時がお別れ句会であったのだ。句会であの特長のある声と披講は印象的で、今もかなしく聴覚に残っている。会員一同と共に冥福を祈ります。

以上のように書いてある。

次男さんは元々新聞編集の技術的な仕事に長い間携わり、豊富な経験の持ち主の新聞人であったし、文芸には造詣深く、俳句なども早くから作っていたことは、その洗練された句で窺うことができるのである。

新聞社で編集部のデスクで執筆中の氏を、私は度々立ち寄り邪魔をしていたものだ。句稿を頼んだり、世間話など雑談も交したものだった。机上には原稿用紙と灰皿があり、皿には煙草の吸い殻で山になっていた。氏の句に、

数え日や　机上の灰皿　　うず高し

という句があるが、私も煙草を吸うので同好として何となく親しさを感じたし、彼の話もまた独特なものがあった。

そうした機会に、同県人でもあり、俳句会に出るよう誘ったところ快く応じてくれ、それから毎月の例会には欠かさず出席していたのである。句会の雰囲気に和み、良き仲間であり、時には堂に入った句評や俳論などもすることがあった。

句会で、今も強く面影に残っているのが、彼一流の披講であった。その句を読む声音を歌うような調子だった。読む流れの響きはさわやかで、故人を彷彿させるイメージの湧く忘れられない思い出のひとつである。

また今回の遺句集発刊に際して、手助けする昌夫さんも長く新聞社で勤めていたので本作りには詳しく相応しいと思うのである。と、ともに、昌夫さんはつくばね句会発足よりの創立会員で、当時から句作していたので俳句は解かるのである。

８４年３月例会の氏の句に

秋めくや
ひとり「第九」
黙聴す

というのがある。これはベトーベンの有名な曲だが、氏はクラシック音楽を愛好する高尚な趣味があることがわかるのである。

私事になるが、むかし東京時代に音楽喫茶店で一杯のコーヒーを飲みながら古典を聴いたものだった。どちらかと言えばわかり易い通俗的なチャイコウフスキーの曲が好きなのである。

話が横道に外れてしまったが、ここで次男さんの作句に対する姿勢を述べなければならない。その作風は繊細で確かな描写は純粋そのもので、成熟した句境にあったことにみることができる。

ここに2、3の句を掲げ鑑賞してみたい。

ものの芽に
割箸立てて
土ならす

句会で、回ってきた清記にこの句を目にした瞬間すごいと思った。そしていただいた。

季語は「ものの芽」で早春の草花や野菜などの芽をいう。その可憐な芽をいたわる心情と被写体を平明かつ細かく描写していることである。この“割箸”が新鮮味があって句をひき立てていると思うのである。

影と坐す
新樹明りの
山の家

初夏の山家を訪ねた折りであろう。樹木のある広い庭、その新樹の影が部屋の中の椅子までも伸びている。客として影の映っている椅子にかけた“影と坐す”という抒し方が鮮明に静閑のひとときを巧みに詠んでいる。

万緑に
咽びつ弄る
谿の水

夏の山である。見渡す限り緑一色に輝いている。ざわめく森から発散するオゾンが一ぱいだ。谿には急流のはしる音がしている。流れはオゾンに酔って、しかも水が咽ぶが如く作者には感じた。鋭い感覚で抒景されていると思うのである。

末尾に拙句を載せさせていただきます。

移民皆　越えし山脈　秋夕焼

以上拙い文章でありますが、おわりとします。

筆者略歴

１７年（大正６）北茨城市に生れる。
高小卒業後、染織図案（着物の模様下図）の勉強で上京。東京は本郷区湯島にほぼ８年、その間徴兵検査があり、東京大学の付属病院に眼の下検査に行く途中、ラジオの臨時ニュースの放送で２２６事件を知ったのである。それは　３６年２月２６日で東京は珍しく大雪であった。
４０年、兄や従兄弟の家族構成の一員としてブラジルに移住した。
俳句は豊秋と号して佐藤念腹を師として５０年近くになる。

次男さん、吾が中学の先輩

若　松　孝　司

次男さんと初めて逢ったのは、茨城県人会の創立総会がさくらい食堂であった時だ。
６１年の５月のことだから、４０年前のことになる。長兄の勘ちゃんが、岩上二郎茨城県知事にたのまれて、ブラジルに県人会を創ることになり、知事の来伯時に集会があった。
私が旧制太田中学の卒業生だという自己紹介をしたことから、次男さんは「あんたは俺の後輩だなあ」と、懐かしそうに近付いて来た。一年間だけだけれども、太田中学に籍を置いたということだ。
私はそれ以前から、次男さんがブラジル将棋界の王者で、名人位を持っていることは知らされていたので、この出逢いにはビックリ

したり、うれしかったり、大変とまどった。しかし、次男さんの生来の人徳というか、奥ゆかしさというか、肩を張らない声のかけ方に安堵した。それにしても、すごい先輩がいるものだ。

次男さんが太田中学に在学したのは父親の武衛さんが、いはらき新聞の太田支局長で、太田に滞在したからである。末弟の昌夫さんの記憶では太田の町の東町二丁目か三丁目当りに住んでいたようだ。あの辺はちょっとした住宅の集りがあって、新聞社の支局長にふさわしい家並みである。昌夫さんは幼稚園に通ったとかだが、この幼稚園は由緒のある幼稚園で、いまも立派な校舎である。武衛さんは石岡に転勤になり、次男さんは太田中学から土浦中学へ転校することになったので、太田中学の在学期間が短いわけである。その後は、あまりお話をする機会がなかった。私が将棋をやらないからだが、新聞社を訪れた時には、簡単な挨拶のやりとり程度で終わった。次男さんは、編集でなくて、新聞を作る方に回ったので、外部との接触が少なかったのだと想像している。

ブラジルのコロニアはいわば村落のようなもので、誰もが親戚になったり、ひっぱりとなる。下手に噂話でもしようものなら、「俺の親戚の悪口を言うな」と言われないとも限らない。私も中林家とひっぱりになるという運命になった。私の女房の弟が、中林家の親戚の子供と結婚したのである。詳しくは、勘ちゃんの奥様の姉の子が嫁に来てくれた次第。

そんな事で、次男さんの奥様がなくなられた報せを受けた時、私たち夫婦は、お葬式に参列することになった。次男さんは子供達に支えられるような姿勢で、さすがに元気がなかった。二度目の奥さんを亡くしたということであれば、当然の落胆であっただろう。私は、「先輩、気を落とさないで、がんばって下さい」と声をかけた。

「先輩」とことさらハッキリと発音して、敬意を表した記憶が今でもよみがえって来る。「ありがとう」という言葉が返って来た。近眼の厚いめがねが光っていた。

茨城県人会では、俳句会が毎月開かれて、私が県人会長の時に、県人会の活動を盛んにする行事を色々ふやした時、俳句会もよいだろうと考えて、遠田七郎さんを中心に作っていただいた。

言い出しっぺの私は、当然の結果として、毎月の句会に参加したわけであるが、いかに力んで見たところで、素人のあさはかさ。さっぱり成績は上がらない。だんだん欠席が多くなっていた。もうそろそろ止めようかと思っていた時、句会に次男さんが入って来た。最初は目立たなかったが、時間と共にめきめき腕が上がって来た。さすがに、生涯を新聞で過ごして来ただけに、文学に対する感情はすばらしい。目をみはるような句が、どんどん出て来た。句会での得点も会が重なると共に大量になった。私はびっくりした。次男さんの句を見て「ほうー」と感心させられたことがしばしばである。

この頃、娘さんの会社で、県人会の３５周年記念号を印刷していただいた。縁は異なものだというが、人間のつながりは続いて行く。次男さんの人徳のたまものであろう。

若松孝司（わかまつ　たかし）

３１年生まれ、東京外大卒、５４年渡伯、パウリスタ新聞記者を経て、マッケンジー大学卒、ソール　ナッセンテ証券社長、ブラジル茨城県人会会長、商工会議所常任理事など歴任。現在ブラジル書道愛好会会長。

中林次男サンを偲ぶ

大　原　友　重

永い間のお付き合いで、私は人格の全く異る二人の中林サンと出会う不思議な経験を致しました。（と言って悪い意味のものでは決してありません）。最初に知ったのは将棋の鬼　中林サンです。棋界が未だ全伯的に統一されていなかった時代でも、既に中林サン父子の存在は際立っていましたから、名声を聞かぬ方がむしろおかしい位い。世間ではこれを大中林に小中林と称し、人々は畏怖しました。将棋の強さは親譲りでも両者の棋風は対照的で、温健で本格派の老中先生に較べ、素人ばなれの感覚は鋭角そのもので、若しそのまま日本にいたら間違いなくプロの道を辿っただろうと噂されたものです。名づけて、冷徹非常の“勝負師”。大会連覇１２期という前代未踏の大記録を残して、やがてその名は消えました。名人位に手の届かない周囲の天狗共が計って中林サンを別格に祭りあげ、活動の場を封じてしまったからです。当然一部には余りにも早すぎる引退を惜しむ声もありました。心ならずも駒を手ばなした中林サンですが、その後は碁石なんかを弄んで僅かに憂さを晴らしているかに見えました。自分では“遊び”の心算りでも、天分に恵まれた者はさすがに何をやらせても超一流！　いくばくも経たず五段の高位を軽くクリアしてしまったのです。

その頃から中林サンの性格は次第に円味を帯びてき始めました。転機とは敢えて申すまい。人間とは年輪と共に自然と巾と厚みを刻んで行くものなのでしょうか。

二人目の夫人に先立たれたばかりか、モート轢き逃げ事件に遭い危く命拾い、相次ぐ悲運を乗り越えての中林サンは、確かに将棋だ

けでなく立派な人生の“勝負師”でもあったと思います。（イヤ、名人と言って良いかも知れません）。これからの語る中林サンは、およそ過去とは関係のない別人の物です。ところで私事に関する話で恐縮なんですが、小生には、若い頃から理想があって、一度好きなスポーツ評論の分野に挑戦して見たいと言う野心に燃えていました。偶々その夢を実現させて呉れたのが日毎紙の編集長に就任したばかりの中林サンであった訳です。感動が乗らないと上手く書けない私は、好リードに助けられて、お陰で存分にペンを走らす事が出来ました。駐在の日本人記者間でも注目されているとあって、少しでも気をぬくと「どんどん書くんだ、怠けるんじゃないッ！」と激励ともつかぬ叱声をよく受けたものです。その意味ではかけ替えのない恩人、師であり、又こよなき兄貴分だったと今なお感謝している次第です。

中林サンは文学にも造詣がふかく、かつて「サンデー毎日」に長編のノンフィクション物を寄稿して、それが堂々掲載発表された事がありました。周囲でそれを知っている者は殆どいないのではないでしょうか。自分を表現するものを極端に好まない当人の口から聞かれる筈は先ずなかったのですから・・・ここに隠れた一つのエピソードがあります。戦後ヘルシンキで開かれたオリンピック大会で日本期待の古橋敗る！　の報は当時不敗主義の日系コロニア社会に大きな衝撃をもたらしました。それを救ったのが間髪を入れず翌朝の新聞紙面を飾った「泣くな男古橋」と題する無名の一投書。時代の流れを冷静に受け止める実に見事なトビウオ讃歌でした。筆者は誰？　となったが、判からず仕舞い。ある情報通が耳打ちして呉れた言葉は「あれだけのコメントができる者は天下広しといえど彼をおいていない。」その時、中林サンが稀にみる文武？　両道の達人である事を初めて私は識ったのでした。

二人の中林サンを評して“異才”と視る、或いは“変人”と呼ぼうと、それは各人の自由ですが、豊かな天分、研ぎ澄まされた知性、そして博学、識見。ただ表面だけを飾る御都合主義者には、その深奥に迫ることはとても不可能な話です。残念なのは自己顕示欲の無さが招いた結果とは言え将棋の「中林」だけをコロニア史に名を止め、あり余る才能を持ち乍ら何一つ文筆家としての業蹟を残そうとせず、此の世を去ってしまわれた点です。

ともあれ、中林次男サン逝って早１０年。兄への畏敬と追慕の念は年毎に増すばかり。この一文がせめて故人への供養となるならば、私の幸いこれに過ぎるものはありません。

筆　者　紹　介

４９年、日伯毎日新聞の創刊社員で、外交面を担当した。短歌をよくし、野球、将棋、囲碁、相撲などスポーツを主に深水徹のペン・ネームを用い紀行文なども草した。

またＮＨＫラジオ愛好会のブラジル代表として、ＮＨＫとの交流を多年に亘り努め、ＮＨＫでも永年の尽力を謝して、９１年訪日観光に招待した。

将棋は“石田流”の大家で、研究に没頭したこともあるので定跡に明るく、実力３段（当時）といわれた。のち囲碁に転向したが、いずれも実戦に参加することなく、思うところあり断念している。

日毎退社後は、商業を営んだが、９５年、突如腎臓炎を冒され小康を得た時もあったが、永い間の闘病の果て９９年５月６日死去した。享年７６。北海道出身。これはその遺稿である。

義父・中林　次男

平　塚　修

最初に義父と面識を持ったのは、彼が５３才の時だった。将棋を指すのが大変好きな人で、徹夜も珍しくなかったのには驚かされたものだった。酒は全然やらなかったが、タバコは身から離さず一日三箱は吸っていた。そういう訳で彼は年齢からして人並み以上の精力の持ち主であったと信じている。

彼は将棋だけではなく、碁も大変強かったそうだ。なにしろブラジルの将棋のチャンピオンを１０年以上も持ち続けたのだから、その方の思考能力はズバ抜けていたのだろう。

親に連れられてブラジルに渡って来たのは、１５歳を少々過ぎた頃で、私が彼を知ってから、時折交わした日本文学や日本の歴史の話の中で、日本で教育を受けた人でさえ持ち難い程の知識を見せられて内心驚かされたことが強く印銀に残っている。

私の妻は長女で、６歳の時母に死なれた。その数年後、彼は再婚して一男をもうけたが、後妻にも運がなく彼女はガンで亡くなった。あれは、私が結婚して一年後で、１９７２年7月で、初孫に当たる私の長女が生まれて未だ一カ月しか過ぎていなかった。

最初の妻の死因は、子宮外妊娠で、突然の事だった。妻の死と残された四人の小さな子供達の事で、絶望感に襲われ、どこかに身を隠して数日家に帰らなかったという。

後年、俳句を嗜み、茨城県人会句会の仲間入りをして、時折の発表会で入賞したことも度々語っていたのを思い出す。

１９８８年に７０歳で世を去るまでに作った５００句以上の俳句に目を通してみると、俳句を習ったこともない私にも、彼が人生の

後期が薄幸であったことが、それらの中に染み出ているのがよく分かる。

私は結婚してからは毎週末カンブシーの義父の家を訪ねるのが常だったが、皆で朝のカフェーを飲む一刻が楽しいものだった。

そんなある土曜日の朝、義父は「俺はもう燃え尽きた灰になってしまった」とボソッとその口からこぼれた。起きて間もない寝乱れした髪の毛と伸びたヒゲがタバコの煙の後で落ち込んでいるのを見るのが私らには耐えられなかった。

義父が亡くなってから早いもので１０年が過ぎた。しかしロベルトソン通りのあの家は未だに、彼の生前そうであった様に子供達の寄り所であり、誰もあの家には住んでいないが、土曜日には彼らは夫々の子供達を連れて来て話に花を咲かせる習慣が続いているのである。それは、あの家が彼らが生まれ育った懐かしい思い出深い所であるということもあろうが、それ以上に、小さくして母を失った彼らがすがって生きて来た片親を強く慕う心がそうさせているのだと私は信じているのである。

編者注記

２６　父が逝った直後（１９８８年）、私達兄弟姉妹と其の配偶者達の意見の一致のもとに、父が生前、住まいの理想的立地条作が自身の自立を可能にするのだと主張し、子供達の誰とも同居することを拒み続け、週末の私達の訪問が習慣付けられていた、１９４８年以来の父の借家を、そのまま維持することになりました。実際には、若い娘や息子達夫婦の日常の邪魔をしたくない気特と、嫁または婿たちの世話になる事に対して、負い目を感じたくなかった事、或いは其の他の家族を除外する事を嫌ったのではないかとも推測さ

れます。
十三年の間、主不在の空き家が、我々子供達が毎週土曜日に集まる場所（又は訪問する事を常に希望する場所）でありました。不在の父も含めて、三十人もの家族が、その家での楽しいひとときを過ごしました―
五人の子供、三人の婿と二人の嫁たち、十四人の孫達、其のの他甥の秀君の家族五人も加わっていました。大人たちが狭い応接間のソファーやクッションに何とか収まって、意見を交換し合ったりする間、子供達や若い者たちは、家中に散らばって、階段に座って話し合ったり、広い歩道に出て遊んだりという感じでした。
２００１年の七月、突然の父の逝去を慰め、残された者達の絆を一層強力なものとしてくれる為にながく役立った其の借家は、既にその使命を果たし終えた為、それを維持し続ける事は、もはや家族の優先する事ではないと感じられたました。友人の志田七栄さんによって執り行われた仏式法要が、五十三年もの間、貸して頂いたその家に別れを告げる象徴的な儀式となりました。然しながら、懐旧の念を禁じ得ない事は確かです。
御祖父ちゃんの家、それは私達皆の市内の別荘だったのです。

(274. ポ語)

ゆ　め

新垣（中林）スエリ

夢。私達の人生を見る時のキーワード。
夢は父よ、あなたは顔つきで、態度で、話で、全ての行動をもっ

て、私達に語りかけて来ました。
常に、あなたは態度で「夢を持つ事を恥じるな。他人の理解を待たずとも良い。夢ま実現出来なかった時に、また、持つ事の出来なかった時にのみ、嘆けばよいのだ、と。自己の夢に忠実であれ、夢に値いする人間になれ」と言っているようでした。
このように育てられ、同じ志を持った私達です。夢を持つ自由、それを試みる自由。
こうして、あなたの人生が一冊の本にまとまりました。これからも、益々大きなスペースを、あなたの子孫のファンタジー実現の為に開拓して行きます。
又会うこともありましょう。夢のまた夢でっすって？　かまいません。

(274. ポ語)

おじいちゃん
石田（平塚）カリナ

おじいちゃんは我々家族にとって、愛と団結のシンボルであった。
そして、我々孫達にとって、一つの人生のお手本であった。おじいちゃんはお菓子やプレゼントで可愛がるタイプではなかったが、私達の学校の成績をいつも気にしてくれた。その勉強への執念が、我々にとって、おじいちゃんからの一番の教訓であった。
一番の思い出は、日本語学校の終業式でお話した時、「発音がい

い」とほめてくれたことだった。それは、私にとって何よりの贈り物であった。
おじいちゃんが亡くなったことは、つらい想い出であり、思い出すと今も悲しみがこみ上げる。
しかし、いまは、そのつらさものり越えることができ、おじいちゃんとのいろいろな楽しい想い出が心によみがえるのである。

(276. ポ語)

心の鏡

島袋　中林　礼子　レダ

父の遺品ともいえるこの作品の真髄は、父として、義父として、又、祖父としても、愛すべき人の思い出と向き合った時、その感動の微笑みの下に隠された涙を感じ取る事の出来る人にのみ理解できるものであります。

長女　平塚　千枝　マルタ
長女婿　平塚　修
孫（三人）　1）石田　平塚　カリーナ
石田　けんじ　クラウジオと結婚
曾孫　ルーカスの母
2）平塚　ひでき　ファービオ
3）平塚　ゆり　ダニエーラ
次女　島袋　中林　礼子　レダ

次女婿　島袋　博文　パウロ
孫（三人）　1）島袋　ロドリゴ
2）島袋　礼子　パウラ
3）島袋　リカルド　アレシャンドレ
長男　中林　由起夫　ミルトン
長男の妻　中林　吉安　よう子　ネイデ
孫（三人）　1）中林　こうじ　エリキ
2）中林　ゆうご　レネ
3）中林　ちえみ　ケリー
三女　新垣　中林　スエリー
三女婿　新垣　ジョン　カルロス
孫（三人）　1）新垣　さゆり　カミラ
2）新垣　ルシアーナ
3）新垣　ガブリエル　フェリッペ
次男（末息子）　中林　香　ラウル
次男の妻　中林　脇山　みゆき　スエリー
孫（二人）　中林　せいいち　ラファエル
中林　タミ

これが父の家族です。そしてこれが父への思慕の大きさとも言えるでしょう。そこに焦点を合わせるだけで、父が私達の人生における唯一の確信とも言うべき存在であったことが容易に推測できる筈です。それは、私達が早く母を失い、その上、又、二度にもわたって次の母を亡くしたために、自身の基盤をゆるがせられたせいかもしれません。父を人生の鏡として、その純粋さ、理想、優しさを受け継ぐと共に、社会に貢献するための姿勢については、彼を凌ぐ力を得たいと願うものです。

ある時、父に次のような言葉を聞かされました。

「人間が其の人生の終わりに与えられる賞与又は罰などというものは、天国、又は、地獄と決め付ける事ではない。生まれたばかりの子供は、見ただけでも解るように、その親から受け継がれた顔を持っている。望まれて、この世に生を受けた子供には、素直さと落ち着きがそなわっているが、その反面、望まれずして生まれた子供には、落ち着きの無い泣き虫が多い。然しながら、年月が過ぎるに従って、人生の様々な障害や機会に直面し、自分の自由意志と姿勢に基づき、自身の衣情を、顔に彫刻するに至るのだ。その為、ずる賢い顔を持った者や、温厚な顔を持った者が出来上がる。これは一々確認してみたとしても、殆ど間違いない実状なのだ。だから、成人してから、鏡に顔を映して見て、自分自身の顔に誇りが持てる者こそ、幸せといえるだろう。それこそ品位ある態度を持って、人生を生き抜いたかどうかに対する、最終的な賞与なのだ。」

この言葉は父自身の人生の選択を全面的にあらわすものです。その非凡な模範に感謝するばかりです。

感謝の言葉

・大変困難な役割を引受けて下さった昌夫叔父様に。長年に亘る貴方の熱意と御尽力無くしては、私たちの本棚には、この作品の占めるべき位置が、今、なお空白のままで残されていた事でしょう。

・八巻培夫氏に。この作品の序文をお書き頂きました事、なお、亡き父の遺した五百句にも及ぶ俳句のポルトガル語訳と(後に<俳句の試み>出版のための三百句を選句)、伯父昌夫、その他、協力者

の方々による寄稿文の翻訳をお引き受け頂きました事、其の際立った有能さと客観性に富んだ御尽力に対して、心より感謝申し上げます。

・義姉妹、宮里島袋恵美子と島袋しずえシルビアに。常に天使のように、私の背後を守り、支えてくださり、私の係っている全てのプロジェクトを支援、且つ補佐して下さることに対し、

・また、半田知雄氏，大原友重氏、山根剛氏（御冥福を祈ると共に）、及び、遠田七郎氏、若松孝司氏対しては、長年にわたる私たちの家族への普遍的な友情の絆を表すお言葉に対して、

・清水みさ子さん（寄稿文の入力）、中島しずえさん（俳句入力）、広田雅子さん（私の原稿の日本語訳）濱田ルシアさん（一般校正）、他、日本語編集の技術補足に関わって下さった方々の惜しみない協力に対して、

・その他の家族のメンバー、特に木村家、熊坂家、島袋家の皆様、及びパウロス美術印別会社の従業員の方々の協力に対して、その他の助力者、及び友人の皆様の長年にわたる御支援に対して、これらの方々のそれぞれの夢が、天の思し召しによって叶えられますよう祈りつつ、心から感謝申し上げます。

島袋　中林　礼子　レダ